

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり



特集 ■ マイスター制度と地域振興

9

2004

ISSN 1340-8917

特集 マイスター制度と地域振興

3 巻頭エッセー ● たくさんの「元気」を一つに、「環境先進都市」の実現

山形市長 市川昭男

4 高度熟練技能の継承と人材育成

職業能力開発総合大学校 生産機械工学科 教授 海野邦昭

8 神戸市 全国に通用するハイレベルの技術・技能基準に認定 ——— 大西 宏

10 大阪府堺市 伝統産業などのイメージアップ、技能継承目指して ——— 西浦伸雄

12 北九州市 工業系製造分野の卓越した技能者対象に ——— 都甲 猛

14 横浜市 「横浜マイスター」による手仕事・手作業の技継承 ——— 木村嘉秋

16 福島県会津若松市 地域農業マイスターで地域の活性化 ——— 小林勝明

18 島根県 地域興しマイスターによるハツラツ農村づくり ——— 三浦 強

20 熊本県多良木町・湯前町・水上村 「奥球磨の達人」核に都市との交流推進 ——— 幸野一樹

28 和歌山県 培った知識・技能伝えるボランティア活動支援 ——— 中谷茂正

30 岩手県花巻市 市民にさまざまな環境配慮行動メニュー提供 ——— 平賀政勝

32 日本ベジタブル&フルーツマイスター協会 青果物の専門家育成し、地域に貢献 ——— 福井栄治

34 沖縄県 泡盛の専門家育成、需要拡大図る ——— 杵鞭充治



玉原湿原



玉原高原のラベンダー畑



迦葉山弥勒寺の大神狗

レギュラー
レポート

コラム

22 人口減少・高齢化時代到来見据えたまちづくり

岐阜県多治見市長 西寺雅也

27 自分の暮らしとまちづくり

兵庫県立大学 教授 中沢孝夫

トピックス

36 北東北ウェルカムカードが誕生

青森・岩手・秋田 畠山英司

37 蔵造りの音楽館整備

長野県大町市 大日方寿二

38 地方行財政関連施策解説

地域通貨の特徴とその支援策

海老澤真吾

41 全国地域リーダー養成塾

不慣れなディベートに挑み、達成感も

地域づくり団体探訪

42 まほろばまちづくり協議会

宮城県大和町

44 はとのさと保育園・おやじの会

兵庫県加古川市

46 センター通信

グラビア

1 マイスター制度と地域振興Ⅰ

23 〃 Ⅱ

47 都道府県漫遊●福井県

48 手前みそですが…

●高知県大正町



各町内のまんどう

●表紙●群馬県沼田市
沼田まつり
毎年八月三・五日に開催される沼田まつりのメインイベントは、日本一大きな天狗みこし。市北東部の迦葉山弥勒寺ゆかりの大神狗面を仕立てたものだ。表紙の大神狗は張り子で、大きさは顔の丈四・二メートル、鼻の高さ二メートル。
担ぎ手が全員女性という珍しさから、人気が高い。「家内安全」「交通安全」などを祈願し、天狗面をみこしに家庭を守る女性たちが家族の安全を願いながら担ぐという趣向だ。
天狗みこしは祭り初日と最終日に登場する。今年の最終日は、一般公募を含め四百人弱の担ぎ手がもう一基の発泡スチロールでできた「観光大神狗」との二手に分かれ、「ワッショイ、ワッショイ」の華やかな掛け声で目抜き通りを練り歩き、大勢の見物客から喝采を受けていた。
最終日は天狗みこしに、祭りばやしを奏でながら巡行する、「まんどつ」と呼ばれる各町内の山車十台や市内二つの神社の勇壮なみこしが加わり、祭りは最高潮に達した。
●文●中 ●カメラ●小形又男



ものづくりマイスター ● 大阪府堺市 (p10) 高田武史マイスターによる鯉のぼりの手描き教室

マイスター制度と 地域振興



神戸マイスター ● 神戸市 (p8)
ものづくり職人大学 洋服コースでの授業風景。マイスター
(手前)の製作指導を熱心に見詰める女性の受講者



北九州マイスター ● 北九州市 (p12)
北九州マイスター「匠塾」で、機械を超える超感覚を備えた東芝セミコンダクター社の村上英俊マイスター(右)が教える機械組立仕上げ(上)。東陶機器の生野保幸マイスターの見事な旋盤の操作に中学生たちもびっくり(下)



地域農業マイスター ● 福島県会津若松市 (p16)
都会からの参加者にそば打ちを指導するマイスターの中村正伊氏



横浜マイスター ● 横浜市 (p14)
横浜マイスター技能教室。和裁を指導するマイスターの鈴木榮治氏



地域興しマイスター ● 島根県 (p18)
畜産マイスター神谷栄子氏による活動「水田放牧」



環境マイスター ● 岩手県花巻市 (p30) マスターの望月達也氏(中央)らの指導で自然を学ぶ



シニアマイスター ● 和歌山県 (p28)
小学生に藍染めを教えるシニアマイスターの杉野正人氏(上)。マジックを披露し小学生との交流を図るシニアマイスターの鈴木猛氏(下)



**野菜・果物マイスター
● 日本ベジタブル&フルーツマイスター協会 (p32)**
食べ比べ授業

奥球磨マイスター ● 多良木町・湯前町・水上村 (p20)

昨年度開かれたマイスター交流開会で子供たちに竹とんぼ作りを教えるマスターの椎葉種蔵氏



**泡盛マイスター
● 沖縄県 (p34)**

泡盛マイスター認定試験の受験者らを対象に、2カ月に1回開催される東京での泡盛のテイスティングの様子(右) 新里酒造での研修で、瓶詰め前に泡盛の貯蔵タンクを背に説明を受ける泡盛マイスター協会の会員(下)





山形市長
市川昭男

たくさんの「元気」を一つに、 「環境先進都市」の実現

山形市の広報誌に「四季彩々」という私の随想のコーナーがあり、山形の美しい四季や人々とのふれあいをつづったものにしようと、就任直後の昨年十一月から掲載している。連載第一回目に地域の伝統行事であった芋煮会が、直径六メートルの大鍋を使った「日本一の芋煮会フェスティバル」によって、山形の秋の風物詩として一躍脚光を浴び、市民はもとより県内外からも多くのお客様が訪れる貴重な観光資源に成長した例を挙げ、山形にはさまざまな潜在能力があり、一人ひとりの持てる知恵を最大限に生かし、市民と行政が力を合わせれば、「元気」なまちづくりの新たな展望も開けてくるという私の思いをつづった。その後、毎回折々に出会った「市民の力」の感動や発見をつづっているが、除雪、消防団、食生活改善推進など市民と行政が知恵と力を出し合い、最小の経費で最大の効果を生み出している例がたくさんあった。このようなまちづくりが山形の「元気の素」になると強く確信しているところだ。

山形市は「環境先進都市」を目指し、将来を見据え、持続的发展が可能な循環型社会を目指した都市経営を進めているが、その基盤として、今年

度から「仕事の検証システム（行政評価システム）」を導入している。職員が一つ一つの事業を「本当に市民の役に立っているのか」「もっと効果的なやり方があるのではないか」など、自ら検証することにより、より効果的、効率的に行政運営を図り、市民の行政に対する全体満足度を高めていこうとするものだ。市民、企業、行政が等しく役割を担う正三角錐の形を理想とし、共に考え汗を流す「共創」の精神で取り組んでいる。

本市は現在、周辺一市二町との広域合併の協議も進んでいるが、新市のまちづくりにあたって、これまでの取り組みを踏まえ、豊かな自然環境や、これまで築いてきた経済基盤、教育、歴史、文化などの社会的環境を生かし、市民生活のさまざまな面で環境の豊かさを実感できる環境先進都市を目指していく。

さまざまな場面にあふれている潜在能力を「元気」に変えていくには、住民一人ひとりの思いと、行政側の住民の目線に立った考え方が必要不可欠であると言える。今一度、自分の仕事を見直し、みんなが元気に暮らせる、環境先進都市を実現していきたいと思う。

高度熟練技能の継承と人材育成

製造業の海外シフト、若者の製造業離れ、高度熟練技能者の高齢化などは技術・技能の空洞化を招き、次世代産業を弱体化させると、危惧される。

現在、日本経済に一筋の明かりが見え始めてはいるが、団塊の世代である高度熟練技能者がこれから大量に退職するとともに、若者の製造業離れが著しく、そしてフリーターが増加しつつある今日の状況から判断すると、以前にも増して、技術・技能の継承が困難になると感じている。しかしながら、若者が製造業に回帰するには、技術・技能者の社会的地位を向上し、その処遇を改善することが前提になると考えられる。その意味において、全国の自治体の多くや主要な企業で「マイスター制度」が創設され、卓越した高度熟練技能者がマイスターとして顕彰されるようになったことは、喜ばしいことである。そこでここでは高度熟練技能の継承と人材育成に関する私見を述べることにする。

ものあまり時代のものづくり

ものあまり時代の現在は「いかに効率よくつくるか」よりも、「何をつくるか」が問題とされる。市場の欲求をかき取る感性とそれを具象化するための概念設計がポイントである。通常、このような試作開発を技術者だけで行うと、失敗するケースが多い。現場の知恵を借りながら、技術者と熟練技能者が協力してアイデアを練り上げると成功するという。同じような製品でも、付加価値を付けることにより高度な商品となる。通常は、このアイデアの発想段階と最終的な仕上げ段階で高度熟練技能が必要とされる。

個人の好みが多様化した多品種・少量生産の時代であっても、「高品質」「短納期」「コストダウン」は常に問題となる。これらを可能にするコア技術・技能は機械では代替不可能である。また、生産システムが故障した場合、その復旧に時間が



職業能力開発総合大学校
生産機械工学科教授

海野邦昭

かかっている、このスピード時代に生き残れない。システムの故障の予知や早期の復旧という点では、熟練技能者の右に出る者はいない。常に創意工夫をし、知恵を働かせ、そして豊富な経験に基づいて、複雑な問題を総合的に判断し、行動により実践する高度熟練技能者は高付加価値形のものづくりには欠かすことができない。また、暗黙知に基づく製品は経験した者だけの専売特許であるだけに、価格競争に巻き込まれることがない。オンリーワン企業になり得る。そのキーポイントは現場主義に基づくコア技術と高度熟練技能と言えよう。

神戸マイスターへの研さん金支給、興味深い試み

現在、全国の多くの自治体で創設されている「マイスター制度」は、ドイツの徒弟制度を法制化したものとは、名称は同じであるが、内容は全く異なるので、注意する必要がある。



建築板金の分野で認定された神戸マイスターによる中学校での実技披露。生徒たちは優れた技能の一端に触れることができた

現在、全国の多くの自治体で創設されている「マイスター制度」の先駆的となった「神戸マイスター制度」を例にとると、次のような特徴がある。この制度は全国的に通用する高度熟練技能者を「神戸マイスター」として認定・顕彰し、その技能者の業績や職業の内容を広く一般に知らしめるとともに、技術・技能職に携わる人たちの励みとするものである。また、マイスターの指導の下に、各種イベントや研修会などを開催し、技能継承を図るものである。そしてこれらマイスター制度の内容はどの自治体もほぼ同様であるが、神戸マイスター制度の場合には認定マイスターに自己研さん金として、毎年十万円を十年間支給することが非常に特徴的である。この自己研さん金の支給は、筆者が提唱する「技術・技能院」の創設に通じ、十年間の確定年金の支給と同様な考え方なので、とりわけ興味深いと言える。

一方、ドイツのマイスター制度は、一九五三年に職能制度として法制化されたもので、この制度下では手工業法に盛り込まれた職種について、マイスター資格がなければ、開業ができず、また、「見習い」を雇って指導することもできないという法的規制を伴うことが顕著な特徴である。そしてこのマイスターの資格を取得するには、見習い工として、三年間働きながら、有料の公的職業学校にも通い、さらに最低、三年間から五年間の実地研修を積んで、その上で試験に合格する必要がある。ドイツの場合には、多様な価値観と能力を認め合う風土がすでに確立されており、マイスターの社会的なステータスは高く、また相応の処遇もなされている。

しかしながら、近年になってドイツの失業率の増大に伴って、マイスター制度の見直しが始まっている。厳しい資格制度が新規創業や就業の規制

になっていること、また、新しい先端技術導入の妨げになっていることなどが根拠である。その結果、現行のマイスター資格取得を義務付けた九十四業種のうち六十五業種について、資格取得義務の対象から除外することとした。そのため、あたかもマイスター制度が崩壊したような印象を受けるが、主要な業種については資格取得義務が維持され

ており、国際競争力の低下に直接結び付くようなものではない。

これに対して、前述のように全国の自治体で創設されている「マイスター制度」は、卓越した技能を有する者を顕彰するもので、運転免許のような法的規制ではない。すなわち、高度熟練技能者にマイスターという称号を与え、その業績を広く一般に知らしめ、社会的な地位の向上を図るとともに、技能尊重の機運を醸成するものである。また、高度熟練技能者の指導の下で、講習会やものづくり体験教室などを開催し、ものづくりの楽しさや大切さを社会一般に広めるとともに、熟練技能の継承、ひいては地域振興を図るものである。

熟練技能の継承

熟練技能を継承するには、教育訓練、とりわけ職場内教育（OJT）による方法と、技能の内容を分析し、文書化、マニュアル化、デジタル化する方法とがある。

技術は形式知であるため、文書などで継承が可能である。しかしながら、熟練技能は暗黙知で属人的なだけに、OJTなどの教育訓練により、継承するしか方法がない。熟練した技能や高度な技術を身につけるには、長い期間が必要とされているので、フリーターの増加、工業高校、技術専門学校および工科系大学のレベルの低下などは、熟練技能の継承をより困難にするとともに、企業における技術・技能者の再教育やOJTに多額の費用と長期間を必要とし、製造業の弱体化を招く。

日本の製造業の大部分は中小企業なので、この

ような企業の多くは、大企業と異なり、企業内教育訓練施設を持たない。また、若者が入社しない、教育訓練をするだけの人員の余裕や設備資金がない、指導者がいない、教育訓練のノウハウがないなど、ないないづくしの状態である。そのため、教育訓練のための資金援助をしてほしい、指導者を派遣してほしい、教育訓練におけるノウハウを教えてほしいなどの要望も強い。

これらの要望に応えるためには、公的な能力開発施設を整備し、いつでも、どこでも、誰でも、必要なときに、必要な技術・技能が、必要なだけ、安価に受けられる労働者の生涯にわたる教育訓練体制を確立することが重要と言える。また、高度熟練技能者をマイスターとして顕彰し、そして中小企業のOJTの指導者として、従事してもらうことも非常に大切である。とりわけ熟練技能者を公的能力開発施設に登録し、必要に応じて企業に派遣できる体制を整えば、中小企業の技能継承にとっても、退職後の熟練技能者の生きがいという点でも、メリットがあるのではないか。ただし、高度熟練技能者、イコール教育訓練指導者ではないので、指導方法や教育訓練のノウハウの修得等が必要と思われる。

次は、文書化、マニュアル化、デジタル化による方法である。筆者は、技術は言語系で、技能は非言語系と定義しており、現在なら、技術は形式知で、技能は暗黙知となるので、厳密には、文書化、マニュアル化、デジタル化されたものは、技能とは呼べない。しかしながら、熟練技能を文書化、マニュアル化、デジタル化することは非常に

重要である。

そのため、「デジタルマイスター制度」を利用して、技術で置き換えることができる技能はほとんど技術化すれば良いと思っ
ている。しかしながら、形式知化された技能はすでに技能ではなく、またすべてが形式知化できるとは言えない。NC工作機械やロボットが開発された時、もう熟練技能者はいらないと言われたが、そうでないことは事実が証明している。熟練技能の継承という点で特に重要なのは、技能者の創意工夫、知恵であり、経験に基づく総合的な判断力であり、そしてそれを実践する能力である。営業などの分野で高業績者の行動特性はコンピテンシーと呼ばれるが、熟練技能の継承においても、コンピテンシーが重要なのではないか。これらに関する研究にも期待したい。

技術・技能者の育成と社会的地位の向上

高度熟練技能者を育成するには、幼児期からのものづくり体験が重要である。最近、全国の自治体で、ものづくり体験教室等が開催されていることは、喜ばしいことである。しかしながら、現状から判断すると、ドイツのように青少年の段階から職業教育をしっかり実施している国と比較して、職業意識に大きな差異が生じるのも仕方がないと思われる。ドイツの場合、職業教育に関係す



技能五輪国際大会（スイス）

る学校は、大部分が公立であり、指導にあたる先生方はマイスターか、公的な資格を持った職業教育指導者のみである。日本の場合、各種専門学校や専修学校などは大部分が私立であり、また、指導にあたる先生方の資格もあまり厳格ではない。このようにドイツと日本とは、国民の職業意識や国の職業教育哲学に大きな差異がある。

最近、ドイツのデュアルシステムを日本版として導入するようになった。このデュアルシステムは、ドイツが誇るOJTを活用した職業教育制度である。教育訓練生は企業に見習工として所属し、教育訓練時間の八〇%をマイスターや教育訓練指導者などからOJTにより、実務や実践の専門知識を学び、残る二〇%を職業学校で理論的な知識や一般教養を学ぶものである。ここで重要なことは、企業内訓練施設も連邦政府の管轄下にあるということ、一般的に企業で実施される教育訓練費用は経済界などが負担し、職業学校に通う費用だけ、公共体が負担している。このようにドイツの場合には多様な価値観が醸成されており、熟練技能者の養成を国全体で行うという社会的なコンセンサスが成り立っているように思われる。そのため「マイスター制度」や「デュアルシステム」が日本において有効に機能するか否かは、企業ならびに国民の間でこのようなコンセンサスが成り立つか否かにかかっていると言える。

また、欧米には「エンジニア」「テクノロジスト」および「テクニシャン」の三つのカテゴリーがあり、それぞれ社会的な地位が確立している。しかしながら、日本には「エンジニア」と「テクニシャン」の区分しかない。主として、エンジニア（技術者）は文部科学省、経済産業省の管轄で、テクニシャン（技能者）は厚生労働省である。そしてエンジニアの資格は技術士法で定められ、また、技能者の能力レベルは技能検定で評価されている。そして「技能五輪」「技能グランプリ」および「卓越した技能者表彰（現代の名工）」などの施策が行われ、徐々に熟練技能者の社会的な地位も向上しつつあるが、ドイツなどと比較すると、関係者の努力にもかかわらず、まだまだという感じである。また、高度熟練技能者の一つのタイプと言えるハイテク技能者、換言すれば、「テクノロジスト、正確にはエンジニアリング・テクノロジスト」は、日本では「技術・技能者」とか、「知識労働者」とかで呼ばれており、「高度な知識を身につけた熟練技能者」で、最近、非常に注目されているが、同様にまだまだその概念も社会的な地位も確立されていない。



技能五輪全国大会



技能グランプリ表彰式

現在、エンジニア資格に関しては、ヨーロッパ・エンジニア（欧州地域）、プロフェッショナル・エンジニア（アメリカ地域）およびAPECエンジニア（環太平洋地域）があるが、それらを統合して、ISO規格（国際標準規格）化しようとする動きがある。また、ヨーロッパではエンジニアリング・テクノロジストの資格認定協定が進みつつある。国際化の時代においてISO9000（品質保証規格）やISO14000（環境保全のための規格）とならんで、エンジニアやエンジニアリング・テクノロジストの資格認定がISO規格化されるのは時間の問題と思われる。幸いにして、これらに関連する技術士法の改正やJABEEの設立などがなされているので、これからは特定非営利活動法人（NPO法人）のテクノロジスト認定機構の設立が急務と言える。

熟練技能者の地位向上、自治体の取り組みに期待

筆者は以前より、若者が製造業に目を見るには、技術者・技能者の社会的な地位とその処遇を改善することが重要と

の立場から、「技術・技能院」の設立を提唱している。今回はそれに加えて、公的職業能力開発施設の整備、企業内教育訓練施設のための公的資格を持つ指導員の養成、および「テクノロジスト認定機構」の設立を提唱したい。長期雇用が崩壊しつつある今日、労働力の流動化を促進し、また技術者・技能者の能力を保証し、適切な社会的な地位と処遇が受けられる「エンジニア資格」「テクノロジスト資格」および「技能士資格」などのよりいっそうの整備は、とりわけ国際化の時代に重要である。加えて、技術・技能者の生涯を通じた継続的な教育訓練が受けられる生涯能力開発体制を整えることが大切である。多様な価値観が醸成され、これらの制度が整えば、「ものづくり」は達成感のある魅力的な仕事なので、多くの若者が夢を持って製造業に飛び込んでくるのではないかとと思われる。その意味において、全国の自治体が「マイスター制度」を創設し、多様な価値観の醸成と、熟練技能者の社会的な地位の向上に以前にもまして取り組み始めたのは、大変素晴らしいことだと評価したい。今後の発展を期待するとともに、ここに述べたことが関係各位の少しでもお役に立てば幸いである。

〔参考〕

<http://www.shou.co.jp/waza/myster.htm>
http://www.kgs-jp.com/rondan/mori_rondan6.html
<http://www.ncdg.jp/dij.htm>
<http://www.iti.or.jp/flash48.htm>
<http://ovta.or.jp/info/europe/germany/index.html>
<http://www.kobe-ipc.or.jp/meister/km-what.htm>

全国に通用するハイレベルの技術・技能基準に認定

—教育現場で積極活用

認定者に研さん金支給

神戸マイスター制度は、神戸市内はもとより全国的にも通用するハイレベルの技術・技能者を「神戸マイスター」として認定することにより、技術・技能職やその職業の社会的評価を高めるとともに、技術・技能者の励みとし、さらに後進の育成を図り、技術・技能の継承を行うことを目的として、神戸市が平成五年度に創設した。

制度発足以来これまでに、洋菓子、紳士服、アパレル、ケミカルシューズ、革靴、洋家具、真珠などの市内地場産業をはじめとする四十八職種、七十三人の神戸マイスターを認定している。神戸マイスターに認定されると、神戸市から自己研さん金として毎年十万円が十年間支給され、より一層の技術・技能の向上を目指して自己研さんに努めることになっている。

また、優れた技術・技能を後進に伝える



「ものづくり交流サロン」では、神戸マイスターが参加者とのコミュニケーションを通じて、ものづくりに対する取り組み、考え方などを語った



(財)神戸市産業振興財団
経営支援部 事業推進課長

大西 宏

ため、業界内研修会などの講師となつて技術指導に当たるほか、専門的な技術・技能を持った社会人として学校教育現場などで基礎的知識・就業体験などについての講演や実技披露を行っている。

地場産業など対象職種幅広く

神戸マイスター制度の対象とする職種は、技能検定や職業訓練の職種を参考にしながら、神戸市の産業実態に合

せて定められている。具体的には、市内地場産業および建設、機械金属、食品関係、その他製造業、サービス業と幅広いものになっている。対象職種は限定するものではなく、制度

発足以来、順次対象職種を追加しながら神戸マイスター制度は運用されている。

高度な熟練技術を要し、その継承に努めねばならない職種として、今後、技術革新の進展、商品、サービスの多様化に伴って職業の専門化や高度化が進み、新しい職種が相応の地位を占めることも予想される。

指導育成能力、人格も重視

神戸マイスターの認定は、原則として各種業界団体からの候補者の推薦を受けて、専門家による現地調査、神戸マイスター審査委員会の審査を経て、神戸市長が行っている。神戸マイスターは、専門分野の卓越した技術・技能はもちろん、人格的にも優れ、若い技術・技能者の到達目標になる人物である。

このため、神戸マイスターの審査の際には、以下の点に留意している。

- ① 神戸マイスターの技術・技能の内容は当該職種で一般に必要とされ、後進に伝えることにより、当該職種全体のレベルアップが図れるものであることを要する。
- ② 技能検定などの公的資格制度がある場合にはその資格を所有しており、できるだけ、作品や全国的な競技会における成績など、具体的な資料に基づき、神戸マイスターとしての認定が客観的に行われることが望ましい。
- ③ 神戸マイスター制度は従来の各種表彰制度と異なり、神戸マイスターに後進育成などの継続的活動を期待しているので、優れた技

術・技能のレベルを現に有しており、また、実際に業務に従事していなければならない。

④ 神戸マイスターは単に技術・技能が卓越しているだけでなく、管理能力、指導育成能力、幅広い関連知識を持ち、人格面でも優れていることが望ましい。

● ゲストティーチャーとして 児童らも高い評価

高い水準の技術・技能を持つ神戸マイスターは、各産業界だけの財産ではなく、神戸市の発展のための貴重な人材でもあることから、技術・技能職の一層の振興のために積極的に市内各地で活躍している。

① 後進の育成・指導

各業界団体が実施する研修会、講習会などにおける講師、指導者として神戸マイスターを積極的に活用し、神戸マイスターの持つ優れた技術・技能を後進に伝え、当該技術・技能職全体のレベルアップを図っている。

また、神戸市がものづくりに関する技術や人材を紹介するため平成十二年度に開設した「ものづくりセンター」において、地場産業の紳士服、革靴、洋家具の三業界が主催する「神戸ものづくり職人大学」の講師として後継者育成に貢献している。



洋菓子マイスター上野庄一郎氏がゲストティーチャーとして生徒の前で実技実習

② 市民啓発活動

平成九年に「マイスターシンポジウム」、十年に「神戸マイスターフェスティバル」、十四年に「神戸マイスター十周年記念フォーラム」を開催したほか、「ものづくり体験教室」「ものづくり交流サロン」など一般市民の方を対象とした行事を行い、ものづくりの重要性を広く市民に広める啓発活動を実施している。

③ 学校教育での活用

神戸市では、学校における教育活動の一環として、「ゲストティーチャー制度」を設置している。

これは、総合的な学習の時間に地域の歴史や伝統文化などを学習する際に、地域の方に講師として教師と児童生徒の学習活動に一緒に入ってもらうもので、専門的な知識・技能や生活の知恵などを指導してもらうことにより、学習意欲を高めることを期待するもので、助言や体験談を通じて生き方や人生観にも触れることができ、生きた教育の一つとなっている。

神戸マイスターはゲストティーチャーとして、一般社会の事業や



「ものづくり交流サロン」会場風景（説明するのは建築大工の三橋孝二マイスター）

優れた技術・技能を披露して広く実践的な教育を行い、児童生徒からも高い評価を得ている。

● 今後期待される効果

神戸マイスター制度は、技術・技能者およびその職業に対する社会的認知を高め、能力向上の励みとなり、優れた技術・技能を継承・発展させる人材を確保・育成することを目的としている。神戸市が優れた技術・技能者を神戸マイスターとして認定するだけでなく、神戸マイスターは、これまで述べたように後進の育成・指導をはじめさまざまな場で活躍している。

神戸マイスターは制度発足と同時に「神戸マイスター交流会」を組織し、相互の交流、情報交換、自己研さんを行い、技術・技能の一層の向上を図っている。神戸市や業界団体が神戸マイスターの積極的な活用や広報などによってイメージアップを進めている。

これらを通じて、神戸マイスターだけでなく、技術・技能職への社会的な評価が高まり、若い人材の流入を促して、優秀な後進の育成が軌道に乗ることが期待される。

また、神戸市を中心とする地域の技術・技能者の志望者が増え、技術・技能の集積として都市の活力を増進し、「神戸の洋菓子」「神戸のシューズ」などの全国的にも通用する高い品質の商品が増加し、都市の産業基盤が拡充されることが期待される。

伝統産業などのイメージアップ、 技能継承目指して

—客を振り向かせ、子どもにもものづくりの大切さ教える

● 安価な輸入品、後継者不足で苦戦

堺は、河内鑄物師を起源とする、日本でも有数の鉄の加工技術をもつ集積地だ。その後、鉄砲鍛冶や包丁づくりをはじめ、さまざまな産業が生まれ、今日に至るまで受け継がれている。しかしながら、その産業集積は対外的なPRが十分でなかったため、マーケットで正当な評価がされていない。

さらに、刃物や線香、手書き鯉のぼりなど、何代にもわたって受け継がれてきた伝統的なものづくりが、今二つの要因で先行きが非常に厳しい状況に直面している。

一つは、海外からの大量生産で安価な普及品により、市場が奪われ、売り上げが低迷している。これには暮らしの洋風化、価値感の多様化などの変化も大きく影響している。二つ目は、職人さんたちの高齢化と後継者がいないことだ。熟練の技を習得するには十年も二十年もかかるという実情



堺市産業振興局商工支援課
主査 ● 西浦伸雄

が、特に近ごろの若者になかなか受け入れられないようだ。

業界の元気がなくなると、そこから生まれた文化までもが弱くなるので、こうした歴史と伝統のある産業が苦戦しているのは非常に残念だ。

例えば、堺の包丁はその業界、料理人などその道のプロフェッショナルの高い評価を受け、圧倒的なシェアを誇っている。ところが、最近では堺に住む人、大阪に住む人でさえこのことを知らない人が増えているのも事実だ。

● 鉄製作、手書き鯉のぼりなど 6人のマイスター

本物志向の時代とはいえ、黙っていても誰も振り向いてくれない。さまざまな方法で情報発信し、お客様を振り向かせ、子どもたちにもものづくりの大切さを教えることが重要だ。

そこで、堺市では平成十三年「堺市

ものづくりマイスター制度」を制定した。これは堺の伝統産業およびものづくり基盤産業の分野において、卓越した技術・技能を修得した人々をマイスターとして認定するものだ。マイスターは小中学校や地域に向いて講演を行ったり、また、事業所での実演の見学、体験を受け入れたりするなど、さまざまな側面からものづくりのイメージアップと普及、さらに後継者の育成とその技能の伝承に取り組んでいる。

平成十六年七月現在では、六人がマイスターに認定されている。独自の工夫を加え、絶妙の切れ味を見せると同時に、見た目の美しい鉄を製作するマイスター、堺に伝わる独特の研ぎ方を駆使し、切れ味鋭い刃物の刃つけのマイスター、地金と刃金をハンマーでたたくことによつてなじませ、より強い鋼に鍛え上げる刃物鍛造のマイスター、機械化が進む中、天然香料と手作りにこだわる線香製造のマイスター、口のなかで淡雪のようにふわ



北村欣三郎マイスターによる線香の手作り教室

りととけるほど極薄のおぼろ昆布を作り出す昆布加工のマイスター、全国でも数えるほどしかない手書き鯉のぼりのマイスターだ。

● 企業、他県からも派遣要請、反響も大きい

この制度を通じて、優れた製品がつけられる過程の大変さ、技の素晴らしさとともに、職人さんのイメージアップやものづくりに対する意識向上につながるようになればと考えている。

現在、市内だけではなく、他の都道府県、市町村、また企業などさまざまな方面からマイスター派遣の依頼があり、また、マイスター派遣制度を利用していただいた人々からは、「職人の仕事への誇り、また、技術の高さを直接肌で感じ取ることができ感動した」との声が多く寄せられ、一樣にその卓越した技術・技能に対して大きな反響がある。これがものづくりのイメージアップと普及に大きな役割を果たすとともに、さらには後継者の育成とその技能の伝承に結び付くことが期待されるところだ。

一方で、堺市にはまだまだ優れた技術・技能がたくさん存在し、それらをさらに社会的な認知を向上させ、継承していくためにも、今後もマイスターを認定していく予定だ。

● 業界もブランド構築・高付加価値化に積極的

余談だが、堺市における伝統産業やものづくりを取り巻く動きを紹介すると、今年度に入り、業界が主体となった、イメージ戦略や新しい販売ルートの開拓などの面から伝統産業、ものづく



森本光一マイスター(右)による小学校での刃物刃つけについての講演会

りを支援する二つの事業が始まり、本市も支援している。

一つが、堺商工会議所が中心となって実施されている「堺ブランド構築支援事業」。地域・企業グループのブランド構築を研究・開発支援することにより、堺の中小製造業の製品・技術に対する信頼性と知名度を向上させ、高付加価値化と国際競争力の強化につながることが期待されている。

もう一つが堺の刃物業界が中心となって実施する「堺打刃物ブランド構築事業」。これは、堺打刃物の社会的信頼を裏付け、類似商品との差別化

を図るために、信頼される堺打刃物ブランドを開発するというものだ。活動としては、ブランドの必要性や有効性を認識し、目標の共有化を図るためブランドアカデミーを開催し、新しいブランド(ロゴ)開発を行い、その後ブランドの信頼性維持向上のため、品質管理委員会にて品質管理基準を作成し徹底するというものだ。

● 業界と一体でものづくりのさらなる発展を

消費不況といわれる中、ヨーロッパの有名ブランドが相次いで日本に出店、売り上げを年々増やしている。こうした企業の商品はただファッショナブルだというだけで売れているのではなく、何世代、何世紀もかけて磨かれてきた技術と、時代に即した本物の商品づくりで、安心感と信頼性というブランドイメージを築き上げてきたのが大きな要因だ。

堺の伝統産業が長年築き上げてきたものづくりへの信頼性は決して海外のブランドに劣るものではなく、職人さんたちの卓越した技術と、創意工夫への探究心を背景にして、さまざまな異なる業種の知恵とノウハウを結集することができれば、新しいものづくりの世界が開けるものと確信している。

堺市は製品の信頼性と知名度を向上させ、そのポテンシャルをさらに引き出すべくマイスター制度やブランド構築事業を展開することは非常に重要なことだと考えており、業界と行政が一体となつて、伝統産業・ものづくり産業のさらなる発展に向け取り組んでいる。

工業系製造分野の卓越した技能者 対象に

—北九州らしさを前面に、継承活動も活発

ものづくりのまち北九州

一九〇一年、官営八幡製鐵所の高炉に火がともって以来、北九州は製鉄を中心に化学、窯業、機械、金属、電機などさまざまな産業が興り、日本の工業近代化の礎となって発展してきた。

その北九州市で、ものづくり百年の歴史を節目として、今後の百年も先進的なものづくりを続けることを宣言したのが、「北九州博覧祭二〇〇二」の開催だった。そしてその博覧祭の開催を契機に創設したのが、北九州マイスター制度である。この制度は、本市の産業を支えている縁の下の方たちである卓越した技能者に光を当て、その優れた技術・技能をこのまちの宝として継承していくことを狙いとしている。これは、市としても、産業の活性化・高度化を図るためには、ものづくりの基盤である優れた人材の確保・育成が必要不可欠であるとの認識からだ。



マイスターに贈られる“オブジェ”と純金の徽章。製鉄所の高炉がデザインされているオブジェは4キロもあり、ずっしり重い。

北九州の特色生かす



北九州市産業学術振興局産学連携課 主査 ● 都甲 猛

北九州マイスター制度の特徴の第一は、工業系製造業の分野を中心にした制度にしたことである。これは、マイスターにふさわしい人材や、それを選考する委員の人材がこのまちには豊富にそろっており、まずは北九州らしさを前面に打ち出した制度としてスタートしようという考えからきている。毎年、現地調査も含めて合計六回にわたって開かれる厳しい選考委員会を経て選ばれたマイスターは、過去三年の間に十五人。職種は溶接、機械加工、金型仕上げ、半導体関連などである。

第二の特徴は技術・技能伝承活動に力を入れているところにある。



鏡面加工されたアルミ製の精密モーター部品を前に中学生に説明する安川電機の安川順一マイスター

また、このビデオはマスコミの取材を受けるときにも有効だ。難しい技術・技能を説明するより、ビデオを見れば一目瞭然というわけだ。実際テレビで放映する際にも素材として自由に活用してもらっている。そのほかにも、企業のホームページで紹介したり、株主総会で上映したりするなど、会社のPRに役立ててもらっている例もあり、ビデオはいろいろなところで活躍している。

一つは、中学、高校、大学など若者向けの活動。その道を極めた達人が製品の展示や技術・技能の実演を交えながら、自らの体験談を基にものづくりの大切さや素晴らしいさを語ることで、若者に感動を与え、ものづくりの世界に興味を持ってもらうというものだ。すでに平成十五年度末までに七十七回、約八千人を対象に実施してきた。

その効果をさらに上げるための工夫が、マイスター全員についてそれぞれの技術・技能の前身や人物を紹介するビデオ（各々約十五分で構成）を制作していることだ。マイスターが話をする前に、まずそのビデオを参加者に見せて、いかにすごい技能の持ち主であるかを理解してもらいたいからだ。「へえー、マイスターってすごいんだ」という第一印象を与えることが、話を聞かせるためには効果的なのである。

また、何よりうれしいのは、マイスターやその家族にも大変喜んでもらっていることだ。「家族に初めて自分の仕事を認めてもらった」「老いた両親が涙を流しながら見てくれて、親孝行ができた」という感想を聞くたびに、我々スタッフも苦勞して制作してよかったとつくづく実感している。話が少しわき道にそれてしまったが、いずれにしろ、こうした次代を担う若者に対する活動は、息の長い取り組みが必要だ。

匠の技伝授する「マイスター匠塾」

それに対し、もう一つの側面として力を入れているのが、市内の主に中小企業で働くプロの技能者向けに、マイスターの匠の技を伝授する活動である。その名も「北九州マイスター匠塾」。マイスターならではの優れた技術・技能を活用し、次のマイスターを育てようというものだ。

技術・技能研修の企画・実施にノウハウを持つ雇用能力開発促進機構（ポリテクセンター八幡）や九州職業能力開発大学校などの専門機関と協力して開講している。これまでに実施した職種は、市内企業のニーズが比較的高い溶接、旋盤、機械組み立て仕上げ、ワイヤーローブ加工。コースに



北九州マイスター「匠塾」で、エムイーシーテクノの山田哲彦マイスター（右端）が溶接に関する多彩な匠の技を中小企業で働くプロの技能者に伝授する

もよるが、土曜日ごとの三〜四日間コースが主で、いずれも大好評だ。

アンケートでは、ほとんどすべての参加者が「次回もぜひ参加したい」と回答している。そうした声を幾つか紹介すると、「溶接の奥深さを初めて知った」「旋盤のバイトの研ぎ方一つで実にいろんなことができるのを知って驚いた」「実践にすぐ役立つ方法を教えてもらい、おかげで新製品の開発までできた」などなど。

これほど好評を得ている理由は、①マイスターの技のすごさに新鮮な驚きを感じると同時に、技術・技能の奥の深さ（まだまだ先がある）を思い知り、それに挑戦する意欲をかきたてる②参加者が互いに他の会社でやっている方法を情報交換することができ③できる限り、それぞれの会社

（現場）で困っている問題を聞き取り、一つでも多く解決してあげるように留意している——ことなどが挙げられよう。

何より、講師であるマイスターの熱意は並々ならぬものがある。ある溶接のマイスターいわく、「自分は溶接が好きだから、たくさんの人に溶接が好きになってほしい。そのために自分が教えられることはすべて教えてあげたい。その結果、自分を超えてくれたらなお

うれしい」。主催している我々事務局こそ、最高にうれしくなる言葉である。

「北九州技の達人」創設

さて、これからの課題はやはり「匠塾」の一層の充実である。研修分野も拡充していきたいし、日数、回数も増やしたい。それには、現役で企業に勤務している現在のマイスターだけに講師を頼るわけにはいかない。幸い北九州市には、ほかにも国の高度熟練技能者の認定を受けている人や「現代の名工」に選ばれた人など、多くの優れた人材が存在している。マイスターに限らず、「優れた技術・技能はまちの宝」として大切に活用し、脈々と受け継がれていく仕組みをつくっていきたい。

既に市内企業の中でも、北九州マイスター制度の創設がきっかけとなって、社内独自のマイスター制度や社内技能検定制度を導入したところも幾つか出てきている。「ものづくり」は「ひとづくり」。市内企業全体に技能性をより重視した人材育成を図る動きが広まることで、地域全体のものづくり基盤がより強化され、地元産業の活性化に結び付くことを大いに期待しているところである。

なお、平成十六年度からは市内の技能士関係団体や市民の要望にも応えるかたちで、市民の暮らしに身近な分野である和・洋裁、調理、理美容、食品加工、貴金属工芸などの分野を対象とした優秀技能者表彰制度「北九州技の達人」を創設し、従来のマイスター制度と併行して実施を始めたことも付け加えておきたい。

「横浜マイスター」による手仕事・手作業の技継承

— 創設から10年、検証行う時期に —

技能職者を取り巻く状況厳しい

一八五九年の開港当時は戸数九十ほどの漁村であった横浜村が、現在では人口三百五十五万人を超え、日本を代表する大都市へと成長していく歴史を振り返ってみると、そこには、開港により外国から流入した文化を既存の文化にただ置き換えるのではなく、融合させ、新たな文化へと醸成し、それを広く国内各地に伝えていった先人の姿がある。

貴重な輸出品であったスカーフなどの産業のほか、洋風建築や洋家具といった外国人向けの技能から、理・美容、塗装、洋服といった市民生活に密接な関係



横浜マイスター技能教室

貴重な輸出品であったスカーフなどの産業のほか、洋風建築や洋家具といった外国人向けの技能から、理・美容、塗装、洋服といった市民生活に密接な関係



横浜市民局
勤労福祉部長

● 木村嘉秋

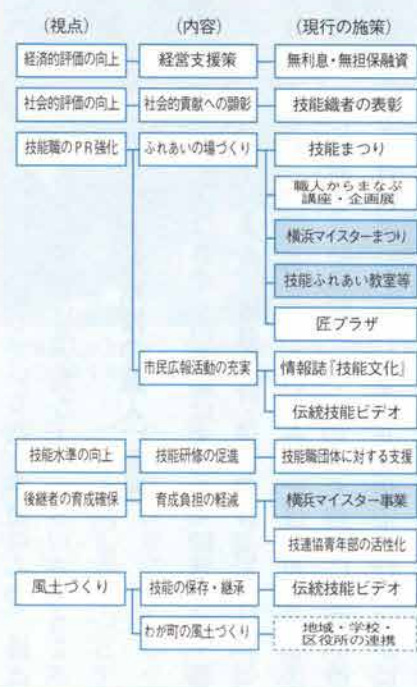
のある技能が、職人・職工と呼ばれるさまざまな技能職者により、現在まで引き継がれている。

しかし、技能職者を取り巻く環境は年々その厳しさを増しており、機械化、自動化の進展に伴い大量生産された安価な商品との競合、手仕事による「ものづくり」への評価の低下、海外への生産拠点の移転による受注の減少などにより、深刻な後継者不足と貴重な技能の喪失に直面している。

手作りで行う技能・技術

には少量生産の手段として高度でかつ必要不可欠なものが多く、機械に置き換えることのできないものもある。こうした貴重な技能が社会的に正しく評価され、事業として成立させていく環境をいかに構築するかが大きな課題と言える。

図1 技能職振興施策体系と課題



横浜市のこのような厳しい状況下に置かれている技能職者を支援するため、従来から数々の技能職振興施策（図1）を行ってきた。中でも平成八年度に創設した「横浜マイスター事業」は、「後継者の育成・確保」「貴重な技能の継承」および「技能職の社会的評価の向上」を図ることを目的とし、市民の生活・文化に寄与する優れた技能職者を横浜マイスターに選定して称号を授与し、その活動を通して、未来に向けての三つの目的を達成するための事業（図2）と位置付けた。

選定に当たっては、手仕事・手作業を中心とした習得に経験と熟練を要する技能職種を対象とし、市内在住の技能職者で継承を求められる貴重な技能・卓越した技能を有すること、後継者育成に意欲を有し、技能伝承の能力に優れていることのほか、できる範囲での技能・技術の公開についても加味している。

これまで三十二人の横浜マイスターが誕生して

技能職振興策としての
「横浜マイスター事業」誕生

いるが、横浜が発祥の地とされる職種も数多く選定してきている。

地域におけるマイスター活動

被選定者には五年間、年五十万円の活動奨励金を支給し、後継者の育成・確保のための活動や、地域・学校・技能職団体、市・区行事などでの実演、講演、研修などの活動を実施してもらっている。中でも活動の力点は後継者育成であるとして、主に若い世代や子供を視野に入れた地域・学校での講演・実演を「技能体験教室」として行ってきた。実施場所については、マイスターの人数が限られているため難しい面もあるが、マイスターの地元ばかりでなく市内全域を対象として、学校や施設を拠点とした地域の住民を巻き込んだ展開を目指している。体験した児童・生徒からの感想文には、マイスターへの感謝、尊敬の念とともに、自分もそうした職業に就いてみたいといった言葉もあり、各マイスターにとっても、そうした手紙や子供たちの喜ぶ姿が自分たちの宝物にもなっているという。技能体験をした学生がマイスターに弟子入りを希望するなど、のケースもでてきた。

事業の普及啓発には、「横浜マイスターまつり」があり、これまでに六回開催され、さまざまな職



横浜マイスター技能教室での森谷正春マイスターの竹細工作り

種の手仕事の技を見学・体験できる場として市民に定着してきた。これは、マイスター自身が自主的に活動することを目的に組織した「横浜マイスター会」主催（横浜市後援）によるものである。かつては、畳など店先で作業を行う職人の姿が市内各地で垣間見られたが、現在ではデパートの物産展などで見かけられなくなった。身近でなくなったこのような機会をマイスター自らが創出していることも横浜マイスター事業の特色の一つである。

課題と今後の技能職振興策について

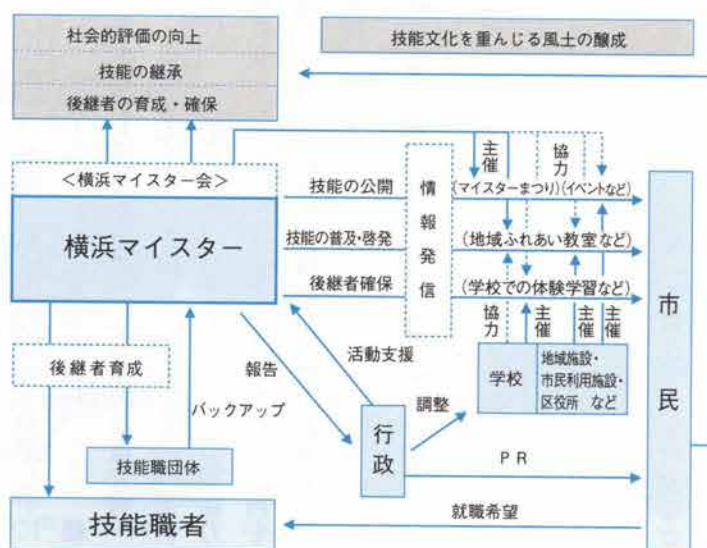
制度創設から来年で十年を迎えることもあり、横浜マイスター事業についても、本市の技能職振興施策全体の中で今後のあり方を含め、検証を行う時期であると考えている。既に活動奨励金の支給が終了したマイスターの割合が全体の六割を超え、企業の定年を迎えるマイスターが出てくるなど、無理のない活動にシフトしていく必要がある。

横浜マイスター事業は、技能職者のPR・後継者育成にある程度の成果を挙げてはいるが、技能職者全体では数が減少を続けている。跡継ぎどころか、廃業をせざるを得ない技能職者にとって、より即効性があり、後継者確保に直接つながる取り組みも考えていかなければならない。今後

はこの状況の渦中にある若手職人を中心とした技能職者の現実も踏まえ、彼らのニーズに応える有効な施策がぜひとも必要である。

時代の波にのみ込まれるのではなく、新しい時代に調和する技能文化を創造していけるよう、横浜マイスターはもちろんのこと、横浜市技能職団体連絡協議会などの関係団体とも連携して、この荒波を乗り越えていかななくてはならない。開港以来、横浜の職人たちがこれまで幾多の試練をくぐりぬけ、培ってきた横浜の貴重な技を継承し、さらに、将来に向けてなお生き続けていく技能の創造を目指していくことが、とりもなおさず、市民の生活を豊かにし、地域経済の活性化に寄与していくものだからである。

図2 横浜マイスター事業フロー図



地域農業マイスターで地域の活性化

—盛んなグリーンツーリズム・農業体験背景に



会津若松市産業振興部
農政課長 ● 小林 勝明

会津若松市は人口約十二万人、福島県の西部、会津盆地の東南にあり、総面積は三百十五・二八ヘクタール、東西は約十七キロ、南北は約二十五キロと、縦に長い地形となっている。東には磐梯山、猪苗代湖、南には布引山、大戸岳といった山々が連なり、西は会津平坦部を縦断する阿賀川が流れており、市街地は地域の北西部に形成され、東から西へ緩やかに傾斜している。

山林面積の割合が約六〇％と高く、農用地は一〇％程度だ。気象は内陸盆地特有の気候で、夏は蒸し暑く、冬は好天が少なく、降雪量が多いのが特徴だ。

県下最大の城下町として発展してきた歴史と伝統のある本市は、会津地方の政治、経済、文化の中核都市として、また、鶴ヶ城をは



りんごの収穫を終えてマイスターの白井康友氏（中央）と一休みする中学生

じめ、白虎隊自刃の地、飯盛山など多くの史跡、名所のほか、東山、芦ノ牧の二つの温泉郷を有する東北屈指の観光都市として、今日に至っている。

農家戸数・生産額が減少傾向

本市の農地は標高二〇〇メートルほどの平坦地域から五〇〇メートルを超える中山間地域に、米を基幹とした野菜、果樹などとの複合経営を中心とした農業経営が営まれている。平成十二年農業センサスによる経営耕地総面積は三千四百七十三ヘクタール、農家戸数は二千七百七十四戸。平成十三年の農業生産額は五十一億二千万円で、うち七割近くを米が占めている。

本市の農業生産は立地条件、気象条件などの地域性から、北部平坦、南部平坦、中

山間地域の三つの地域に大きく分けられる。市街地の北西部に位置する北部平坦地域では平坦で優良な農地が広がり、全国的にも評価の高いコシヒカリなどの銘柄米の作付けや、会津農書が著された古くからの菜園場として、トマトなどの施設園芸作物、りんごなどの果樹栽培も行われている。

南部平坦地域は市街地の南部に位置し、水稻を中心とした作付けが行われる一方、会津人参や会津身不知柿という会津を代表する特産物が栽培されている。

中山間地域は標高四〇〇メートル以上の高冷地であり、猪苗代湖西岸の地域では本市の三分の一を占める広大な農地で水稻、野菜、花きなどが栽培され、本市の農業生産の主要地域となっている。経営耕地面積、農家戸数、農業生産額は年々減少傾向にあり、農業、農村活力の低下が進む中であって、平成十四年三月に本市の食料、農業、農村の基本理念と施策を定めた「会津若松市食料・農業・農村基本条例」を制定するとともに、条例に基づく「共生と循環、農村文化がいきづく魅力ある農業をめざして」をテーマとした基本計画を策定し、農業、農村の活性化を目指した施策の推進を図っている。

豊かな農業経営の実践経験活用

近年、農業や環境に対する関心が高まり、当市においてもグリーンツーリズム事業や学校での農業体験が盛んに行われている。その際、重要なものが受け入れ農家における講師役の存在だ。単に栽培技術だけでなく、農業・農村が果たす役割など



小学生に刈り取った大豆の仕組みを説明するマイスターの高橋茂喜氏

を含めてきちんと伝えられる知識・技術を持った人となると数は限られる。そういった情報を市で収集し、認定することでグリーンツーリズム事業や農業体験がよりよい形になるのではと考え、平成十五年度より「地域農業マイスター制度」をスタートさせた。

この制度は農業経営および農村生活において、豊かな実践経験および専門的知識を有する農業者を会津若松市の地域農業マイスターとして認定し、その経験・知識を活用することにより、地域農業における生産性の向上、郷土文化の振興ならびに都市住民との交流などを通じての地域の魅力

および活力の創造を図り、農業・農村の活性化に資することを目的としている。

● 水稲、園芸、そば打ちの達人そろっ

地域農業マイスターに認定する基準は①農業・農村の各分野において、優れた実践経験および高い知識を有する②知識・経験を生かした指導を行うことができる③農業経営および農村生活を通じて、地域農業及び農村の発展に寄与した④他の農業者の模範と認められるの四つだ。これまで、これらの条件を満たした十人が地域農業マイスターとして認定されている。

認定されたマイスターは①水稲、園芸作物などの生産技能に優れている②そば打ち、もち加工を指導できるなど、さまざまな分野の人がそろった。

今年度までに、グリーンツーリズム事業で本市を訪れた都会の人々を対象に、地元で取れたそば粉を使ったそば打ち教室の先生として指導にあたり、中学生の農業体験で大豆の種まきや刈り取りの指導をしたり、また、地元の小学生にもち加工の過程を見せたりと、市内外の子供から大人まで多くの体験で指導していただいている。どの体験においてもその農業に対する知識の深さや持っている高度な技術を参加者に肌で感じていただけたと思っている。

● メニュー充実で農業への一層の理解を

今後はさらにマイスターの数を増やしていくことはもちろん、マイスターの人々が活躍できる場



地元の小学生にもち加工について説明するマイスターの渡部サク子さん(右)

を設けていくことが重要と考えている。また、食農教育の推進から農業体験では生産面とその後食としての利用、活用まで一体的に体験できるようなメニューも用意し、より深く農業を理解してもらえようというと思う。

今、農政においては食料自給率の向上と併せ、食の安心・安全に向けた取り組みが求められている。そうした状況の中、マイスター制度の活用により、都市住民との交流を一層推進し、農業、農村の持つさまざまな機能、役割を理解してもらい、農村地域の活性化につながるよう、今後とも努力していきたい。

地域興しマイスターによる ハツラツ農村づくり

—加工品開発、産直市の開設など新たな取り組みも



島根県農林水産部 農業経営課
地域農業グループ 主任

● 三浦 強

地域興しマイスター制度

島根県は東西に細長く、その距離約二百三十キロ、北は日本海に面し、島根半島の北方海上には、隠岐諸島がある。自然豊かで風光明媚な県土は面積の八四・三％が中山間地域となっている。中山間地域においては、地域興しの気運が増してきてはいるものの、身近に必要な知識・技術に精通した人材がいなかったため、十分な取り組みができない地域も多い。

そこで島根県では国庫補助事業の「特定農山村総合支援事業」を活用し、地域の活性化のために貢献できる能力と意欲を持った人材を「地域興しマイスター」として登録し、彼らの指導、支援による地域の活性化を推進しているところである。人材の選定・登録にあたっては、県下全域からより多くの人材を確保するため、県内七カ所の県地方機関単位の協議会で行っている。

平成八年度から実施してきたこの事業も今年度



消費者交流マイスター寺本恵子氏の講演（上）
橋波地区で始まった「農家レストラン」（下）

で九年目を迎え、地域興しマイスターとして登録された人材も百四十九人に上り、専門分野も作目生産から農・水産加工、郷土料理、都市農村交流などと多岐にわたっている。

県内の農業者グループなどがマイスターの指導

を受けた場合に、県が間に入り、マイスターとの連絡調整や指導に係る経費を助成している。また、マイスター自身が資質向上のために行う全国イベントへの参加や、先進地調査などへの助成も行っている。現在まで年間十五〜二十回、マイスターによる指導が実施されてきた。これにより、柿ソフトクリームなどの加工品開発や産直市の開設、消費者との交流による地域の活性化といった新たな取り組みが県下各地で行われてきた。以下にその一部を紹介する。

マイスターによる地域興し活動紹介

①消費者交流マイスター——佐田町橋波地区での活躍
簸川郡佐田町橋波集落は県東部の中山間地域に位置する八十三戸の農村集落である。ここでは自治会の枠を超えた「橋波振興協議会」が組織されている。

平成十二年度には農業の六次産業化を目指し、協議会の活動として「橋波げんき塾」を開催した。初回講座で消費者交流マイスターである寺本恵子氏（石見町）を招き、地元産物を生かした消費者との交流のあり方について、「かわる人が楽しいことが継続の源」「生涯の遊び場づくりが必要」といったコツを聞き、きめ細かい指導を受けた。寺本マイスターが代表を



地域農業マイスター佐伯徳明氏による講演

務める「おふくろネットワーク石見」は町内や広島市内に直売市を開設し、消費者との交流を大切にしたい産直活動を行っている。講演の一月後には石見町へ視察に行き、同年十二月には女性九名で「農家レストラン」を開催するに至った。その後、年二回のペースで開催を続けているが、限定定員が六十人のため、毎回お断りをするほど好評となっている。また、農家レストラン開設の翌年からは「橋波げんき産直市」も始まった。

協議会の事務局は「げんき塾の塾生にとって実践者であるマイスターの話は大きな刺激となった」と振り返る。地域興しマイスターによるやる気起こしがきっかけとなったこれらの活動は集落の新たな取り組みとして定着している。

②地域農業マイスター―集落営農型農業法人の育成
島根県は認定農業者、農業法人とともに地域農業の担い手として集落営農組織の協業化・法人化を進めているが、県南東部、広島県に接する仁多郡横田町においては、平成十四年度に五つの集落営農型法人が誕生した。

けん引役となったのが、地域興しマイスターである佐伯徳明氏（横田町）である。

町農業公社の元専務理事であり、また自身の集落においても一足早く法人化を成し遂げた佐伯マイスターは、平成十三年十二月に実践者として町内各集落営農組織へ呼び掛け、五組織による「横田町集落農業研究会」を結成した。

研究会には各組織の役員が出席し、毎月一回法人化へ向けての勉強会を重ねていった。農地流動化の必要性や法人化の意義など、佐伯マイスターの継続的な指導により、回を重ねるごとに各集落の積極性が出てきた。その結果、平成十四年十二月に三法人、翌年二、三月にそれぞれ一法人が設立され、研究会に参加したすべての組織が法人化した。

平成十五年度には横田町特定農業法人ネットワークを立ち上げ、米の販売を共同で行うなど足腰の強い経営体とするべく、引き続き各法人の指導や法人間の連携を強化する取り組みを実施している。

③畜産マイスター―水田放牧の普及

大田市富山町は県のほぼ中央に位置し、和牛の繁殖経営が盛んな地域である。
畜産マイスターである神谷栄子氏は富山町和牛

改良組合婦人部の代表でもあり、昭和六十二年から六十二人の部員を引っ張ってきた。

平成六年から独自の発想により、転作田や遊休農地を利用した県下初の水田放牧を始めた。平成九年度からは他の部員も取り組み始め、富山町内全域に広がった。

平成八年度にマイスターとなった神谷氏は、国や県が主催する研修会に積極的に参加し、自身の資質向上を図るとともに、手づくりの機関紙を作成・配布するなど部員の意識高揚にも務めてきた。「マイスターになってからは、そのことが自分の意識付けとなり、地域活性化のための活動の原動力となっている」と神谷マイスターは語る。

声が掛ければ町外にも講演に行き、時には婦人部として寸劇の出前公演をしたりもした。

今では出前放牧と称して自分の牛を貸し出して他農家の不慣れた牛たちを放牧に慣れさせるなど、積極的な取り組みが実り、富山町内の放牧頭数は百三十頭、三十六ヘクタールに増えるとともに、水田放牧は富山町から大田市内へ、そして県内へと広がっている。

むすび

地域興しは住民の主體的な参画により行われるものであるが、その動機付けをするのがマイスターの役割である。今、県内各地にはマイスターの活躍により地域興しの種子が播かれ、花咲いたもの、芽を出し始めたものさまである。今後、これらの取り組みが一つでも多く花咲き、実を結ぶことを期待している。

「奥球磨の達人」核に都市との交流推進

— 広域連携で特色ある資源活用



水上村企画観光課

● 幸野一樹

「奥球磨」とは、熊本県南部を流れる日本三急流の一つ「球磨川」の最上流部に位置する、球磨郡多良木町、湯前町、水上村の三町村のことをいい、自然が豊富で、鎌倉時代の史跡を中心に国指定の重要文化財も数多く残っている山里である。

この奥球磨地域は平成七年度に、それぞれの町村が持つ特色ある資源を単独で活用するのではなく、より広域的かつ効率的な利用を主眼とした

「上球磨地域広域連携ビジョン」を策定し、今後、地域内・外の交流人口の増加を目指すこととした。そのビジョンを基に実現可能なものから取り組んでいく組織「上球磨地域連携推進協議会」を平成八年四月に設立(平成十年度から「奥球磨広域連携推進協議会」へ名称変更)し、観光面のPRを中心に町村の枠を超えた種々の連携事業に取り組んできた。その中で、この地域内の住民で多様な知恵や技を持った人たちが都市住民に紹介し、交流を進めていく事業が「奥球磨マイスター制度」である。

具体的には、奥球磨地域で伝統的な技術、農産

加工、ものづくり、アウトドアの指導、遊びの指導、文化財に関する知識などで秀でた人を登録し、都市部との交流人口の増加を図るための核となってもらう制度で、マイスターを「奥球磨の達人」と位置付けることにした。

マイスター発掘して本格的スタート

まず初めの取り組みとして、平成九年度にこれまでの木工やカヌー、そば打ちなどの体験に、新たにファミリーキャンプを加え、「夏休み奥球磨体験隊」と銘打って三町村で六つのメニューに取り組んだ。この取り組みは翌年度も同様に行い、その結果、これまでに指導をされてこられた人のほかに、体験指導の経験がなかった人たちにも取り組んでもらうことになり、マイスターの活動を地域に紹介することで、薬膳料理作りやカービンなどの新たな体験交流への取り組みにもつながった。これが奥球磨マイスター



体験型観光の確立のためのワークショップ

制度の第一歩となった。

その後、平成十一年度にはマイスター登録モデル事業として、自薦他薦を問わず多様な技や知恵を持った人を登録し、具体的に交流活動を推進していくこうとマイスター登録台帳を整備し、当初、奥球磨三町村で四十八人のマイスターが登録された。当時、登録されたマイスターのほとんどが各役場担当者からの推薦であり、地域内住民のマイスターとしての掘り起こしとしては有効な手段であったように思われる。しかしながら、その台帳を基にした具体的取り組みには至らなかった。

体験型観光への取り組み着手

そのような中、平成十二年度に、国土庁(現国土交通省)の調査事業の採択を受け、奥球磨マイスターを活用した体験型観光交流システム確立のためのワークショップを行い、指針を策定する

「奥球磨マイスター(達人)制度確立事業」に取り組むこととなった。第一回目は、体験型観光に対する住民の理解を深めるため、実際に体験型観光に取り組んでいる高知県(株)四万十ドラマ事務局・畦地履正氏の講演会と、奥球磨で「水上ツーリズム」と銘打った自然体験型観光に平成十年度から取り組んでいる水上村の住民や水上ツーリズムへの参

その後、平成十三年度に奥球磨マイスターの活動をPRするための、「奥球磨マイスターガイドブック」と「マイスター紹介用パネル」を作成、

ガイドブックなど作成、 マイスター活動積極PR

その後の取り組みとしてはマイスターの自主性が重要であり、それをバックアップしていく行政担当者の熱意が必要であることが分かった。この事業の中で行った講演会やワークショップに出席したマイスターが現在の活動の主体となっている。

加者によるパネルディスカッションを行った。その後ワークショップを重ね、モニターツアー「真冬の奥球磨こだわり体験隊」を開催した。これらの取り組みを一年間かけてやってきた中で、やってみたいというマイスターとそうでない住民との間に温度差がはつきりと表れた。



「奥球磨マイスターの可能性」を探るパネルディスカッション（上）。マイスターの指導を受け、モニターツアー参加者が竹のはしや食器を作っている。子供たちは竹馬など遊び道具作りに懸命（下）

しかしながら、平成十五年度、奥球磨地域での市町村合併の検討に伴い、奥球磨広域連携推進協議会が活動を休止したため、マイスターの活動に行政からの協力がほとんど得られない状況になっ

近隣地域とも連携

「村」のページを開設した。平成十五年度には、マイスターの自主的な取り組みとして体験イベントを実施、また、マイスター同士の交流を深め、お互いの活動や知識を共有する「マイスター交流展」を開催し、郷土の歴史やマイスターの技、作品の数々が一堂に会し、その後のマイスター活動にさらに弾みをつけることとなった。人吉球磨地域の情報誌にもマイスターを連載で紹介し、地域への浸透も図っていた。

また、湯前町で開設された街づくりサロンを活用したマイスターの作品やパネルの展示、マイスターの紹介などを行った。また、対外的なPRとして、県内のFMラジオで毎週、奥球磨地域とそこに住むマイスターの紹介を行い、それと同時に、同局のホームページ内にマイスターを紹介する

「奥球磨マイスター」という呼び名で活動するようになって八年目、ようやくマイスターの独自性、活動の方向性が確立されてきたものの、まだまだ分野的に「ものづくり」に集中しており、今後は活動分野のさらなる多様化を進めるとともに、常設事務局の設置、広報活動、行政からのバックアップなどの課題を一つ一つクリアしていく必要がある。



昨年度開催されたマイスター交流展での陶芸体験

また、新たなマイスターの掘り出しにもつながることとなった。今年度は、「奥球磨マイスターの会」を、奥球磨地域だけでなく人吉球磨地域で活動する人たちで任意の団体として設立する予定で、熊本県伝統工芸館での奥球磨マイスター展も開催される計画である。

人口減少・高齢化時代到来見据えた まちづくり



岐阜県多治見市長

西寺雅也

多 治見市は千年を越す長きにわたって、陶磁器を焼き続けてきました。現在でも「美濃焼」と呼ばれ、

地場産業として和洋食器の分野では国内の五割を越すシェアを持っています。一方、一九七〇年代後半から名古屋市のベッドタウンとして住宅開発が進み、人口が増加してきたま

ちでもあります。来たりする横ばい状態になっています。多治見市ではこうした状況を見据え、近い将来、人口減少と高齢化の波が押し寄せてくることに注目しました。ことに一時期の開発によって人口構成に偏りが生じ、「団塊の世代」が著しく多く、そのため、この世代のリタイアする時期がまもなくやってくることを重大な課題ととらえています。そこで今、「持続可能な地域社会づくり」を市政の柱に置こうという取り組みを始めました。

多治見市は大小幾つかの盆地状地形になっており、旧市街地はその盆地の底である、平地に形成されてきました。その旧市街地を取り囲むなだらかな丘陵地に住宅団地が開発されました。しかし、バブル経済崩壊後、経済活動の鈍化や地価の下落もあり、名古屋都市圏が収縮を始め、名古屋都市圏のもっとも外縁部に位置する多治見市への開発圧力は急速に衰えてきました。急増していた人口も十万六千人のラインを行ったり

く考えています。一つは「しごとづく

り」であり、もう一つは「安心と誇りの持てるまちづくり」です。「しごとづくり」は地域経済の課題としてのしごとづくりとコミュニティビジネスや民間非営利団体（NPO）、ボランティアによる地域社会を支えるためのしごとづくりです。そして、人口定住、定着のためのまちづくりの必要性です。

これまで、まちづくりの課題としてきたのは「ビクターズ産業興し」です。地場産業を持ちながら、それは外へ売りに行く産業でした。それを多治見市にあるシーズを生かして外から来てもらうまちへの転換を図ろうとするものです。「オリベストリート」と名づけた二つの地区、一方は中心市街地に残るかつての商家の家並を活用したまちづくり、もう一方は小さな盆地にある陶業地（窯

元）の楽しさを生かすまちづくりを行おうと動き始めました。徐々にではあれ、これらの地域を訪れる人たちが増え始め、まちはきれいになり、新しい店舗も開かれるようになりました。

市 内の他の陶業地でもまちづくりの動きが始めています。こうしたことがそれぞれの地区の良さを発見、特徴あるまちづくりへの取り組みといった動きをつくり出す相乗効果を生んでいます。まちづくりが多様な市民の活動をつくり出し、発展し始めることによって多治見市の元気が保たれ、つくり出されていくと信じています。足元の住んでいる地域に対する愛着と市民相互の連帯こそ、高齢社会に立ち向かう原動力であると思っています。



キノコ学習会。マイスターがキノコの「植菌」から丁寧に指導



マイスター森田葉子さんのフラワーアレンジメント講座



マイスター早川輝子さんの初心者水墨画教室



マイスター鹿野内みゆきさん（左から3番目）の初心者手話教室。幅広い年齢層の人たちが楽しく学んでいる

ライフアカデミーマイスター ● 北海道鹿追町

町内の人たちの知識や経験を積極的に活用する目的で、「生涯学習人材バンク」として平成8年度に開設された。現在は約60の指導項目に80名が登録。趣味から教養、暮らし、伝統文化、スポーツなど活躍の分野は幅広い。マイスターが自ら講座を開く場合と、希望者がマイスターに指導をお願いする場合の二通りの方法で学ぶことができる。行政は講座の周知など側面的に支援するだけで、住民自らの学習活動として行われている。

マイスター制度と地域振興

すみだマイスター ● 東京都墨田区

墨田区は付加価値の高い製品を作る技術者を認定。墨田の産業を支えてきた優れた技術を公開することにより、技術の普及・向上を図り、さらに次代へ向けての新しい技術の育成を図りながら、ものづくりの「技」を人々の暮らしに届く“商品”に育てることを目指している。墨田を代表する技術である藤工芸、屏風表装、ガラス工芸、野菜菓子の製造などに、39人がマイスターとして活躍している。



小峰 尚氏
(藤工芸)



磯貝鉄夫氏 (屏風表装)



石井芳和氏 (誂え足袋の仕立て)



片岡恭一氏
(屏風表装)



丸山壮伊知氏 (野菜菓子製造)



片桐久夫氏 (ガラス工芸)



白馬岳登山での大雪渓の登り



フライフィッシング



毛バリ作り

白馬マイスター ● 長野県白馬村

白馬三山や五竜岳など北アルプスを代表する山々の東側山麓に位置する白馬村。さまざまな分野で卓越した技術や知識を身につけた「白馬の達人」のガイドを通して観光客らに白馬の魅力をより深く楽しんでもらう趣旨で平成13年10月にスタート。白馬の魅力を代表する登山・トレッキング、スキー・スノーボードなどのほか、アウトドア・河川、民俗・くらしなど7つのジャンルにさまざまな技能を持つ個人、団体が登録されている。

農村生活マイスター ● 長野県

より豊かな農家・農村社会を目指し、①農業経営・農家生活の向上、地域振興に意欲的に取り組み、信望が厚い②農業などの実践活動集団で意欲的に活動している——の要件を満たし、一定の研修を修了した女性農業者を県知事が認定、称号を与えている。平成15年度末で、648人のマイスターが特産品開発、農業委員会や地方議会での女性の声の反映、学校給食への地元農畜産物提供のシステムづくりなどにそれぞれの地域で活躍している。



園児たちと麦踏み交流



ブドウの房づくり。助け助けられ、笑顔で交流



園児たちに「やしょうまつくり」を体験指導



修学旅行生に「ほう葉巻き」づくりの体験指導



食農教育の一環で、ジャガイモ収穫体験



マイスターを対象にした、水稻の生育診断技術（出穂前日数の判定など）の実技研修

お米づくりマイスター ● 島根県鹿足郡農林業振興協議会

山口県に近い鹿足郡の4町村と県の出先機関、農業団体が構成する同協議会が主産業である地域の稲作レベルの向上を目的として、平成14年度に創設した。稲作講座を通じて地域の稲作指導者に認定されたマイスターは、自らの品質向上対策の実践と、周辺農家への情報提供および指導・助言に当たる。現在、地域の稲作のレベルアップに対する意識の高い61人のマイスターが活躍、管内の水稻の品質向上に努めている。



(上) お米づくりマイスターの認定講座を受ける農家の人たち

(左) 認定講座の中で、水稻の生育診断方法および生育収量調査方法の研修



1次処理した生ごみに、もみがら、米ぬかなどを混和する第2次処理作業実地研修

コンポストマイスター ● 三重県

三重県は平成13年度から、(財)三重県農林水産支援センターに委託して「コンポスト(堆肥)マイスター育成事業」を始めた。家畜ふん尿をはじめ、有機性廃棄物の堆肥化などによる土づくりなど自然循環機能を活用した農業を推進する上で、生産現場での「堆肥の生産技術・施用方法」「環境保全型農業」などの指導に積極的に取り組んでいける人材を育成するのが狙いだ。現在、18人のマイスターが各地域において、台所の生ごみを堆肥化し、地域の農地に還元する活動などのけん引役として活躍。

(講義・実地研修場所はいずれも (財)三重県農林水産支援センター)



講師による講義風景



実地研修で第2次発酵進行状況を確認



生ごみ堆肥の窒素、リン酸、カリ、pHなどの成分分析が分かっていることが望ましいため、実地研修でpH試験を行っているところ



里山交流会

里山マイスター ● 山口県

人間に安らぎやゆとりを与えてくれるとして、その役割が見直されている里山の再生などを目指し、平成13年に策定された「やまぐち里山文化構想」の推進役。具体的には、里山を管理する専門家として、里山を守り育てたり、林業体験などを通じて地元集落と都市住民との交流、連携を図ったりする里山活動を企画、実行する。昨年3月に県民に里山生活を指導したりするインストラクターを含めた里山人を組織化した「NPOやまぐち里山人ネットワーク」が設立された。

ビオトープ草取り



下刈り作業



椅子づくり

上村弘士先生のお菓子ケーキ作り講座



マイスターズクール ● おかやま山陽高校

マイスターズクールの特徴は脱学科、脱学年、脱評価の三本柱。生徒は自分の学科・専攻に関係なく、好きな講座を選択でき、講座は異学年の生徒が混在して履修。評価は生徒の履修態度、やる気をもとに絶対評価で行われている。開設講座は5年目の現在44、マイスターの先生はさまざまな技能や技術を有する地域の名人、達人たちだ。学校の風通しが良くなり、生徒のみならず、教員にも良い刺激になっている。地域に学校の良い評判を広める結果につながっている——というのが原田一成副校長の評価だ。

吉田真純先生のスポーツチャンバラ講座



浦田恵子先生のゲートボール講座



能楽講座。笛を指導する八木原周平先生（左から3番目）、能楽師の大島文雄先生（4番目）、同大島衣恵先生（5番目）

近 所に大型ショッピングセンター

が出来ると聞いて、商店街に閑古鳥が鳴くようになるのではないかと心配し、さんざん相談したのだが、特別の対策があるわけではなかった。しかし、「長いこと地域の皆さんにお世話になったので、この際、恩返ししよう」と活動を開始したのが、池袋から東武線で十五分、練馬区のニュー北町の商店街だ。中心は商店街の奥さんたちである。

商店街で管理する地区会館を利用

して、お母さんと子どもが一日過ごせるような「子育て支援」の場所をつかった。マンションに子どもと一緒に引きこもっていないで、みんなと過ごそうという企画である。もう一つが、ミニデイサービス。お年寄りが一日過ごせる場所づくりだ。太極拳やうどん打ち。民謡の日、落語家の卵を招いてのミニ寄席。もちろんカラオケ大会も。さまざまなメニューを考え出した。

ミニコミを発行し配ったり、知り合

いに声をかけたりしているうちに、あちこちからたくさんの方が集まり始めた。夏の阿波踊り、冬のイルミネーションコンクール、朝市、ナイトバザーといった各種の取り組みのほか、ボランティアを始めた。例えば、障害のあるお子さんを持つお母さんが一時入院することになり、その間お母さんの代わりにお子さんを施設に送り迎えしたりした。あるいは各種イベントの手伝いや地域の清掃と、さまざまな活動が始まった。

一一〇〇〇年にスタートしたこの

「ご恩返し」は、今は「北町大家族」という民間非営利団体(NPO)に発展している。もちろん大型スーパーはその後、出来上がったが、結局、六十軒ほどのこの商店街でつぶれた店は一軒もない。結果として豊かなコミュニティのネットワークが広がったのである。地域活性化の典型例である。

さて、その「地域」とはなんだろう

う。みんなはどのような空間を思い浮かべるだろう。筆者は地域と言ったとき、いわゆる小学校や中学校の学区程度の広さ・範囲を念頭においている。人口にしてせいぜい四千人から七千人程度の領域である。

もちろん、筆者やその少し後の団塊の世代が育ったところと、少子化が進んでいる現在とでは学区の広さもだいぶ違うので、世代によって学区のイメージも異なっているかもしれない。

しかし、人と人とお互いに知り合い、また直接話したことはなくとも、顔を見れば「ああ、あの人はどここの誰」と見当のつく範囲は今も昔も変わらない。「町会」といった範囲と言ってもよい。

い わゆる「まちづくり」あるいは

「地域づくり」を見ていると、だいたいのところが、狭い、限られた範囲で取り組まれているのは、しっくりとした

コミュニケーションのとれる広さがその程度だからだと筆者は思っている。

そのことは「中心市街地の活性化」といっても大きくは変わらない。活性化に積極的に取り組む人たちは、お互いの力才が分かっている範囲であることが多い。もちろん大都市の繁華街や中心地の場合、近隣の大学生らがさまざまな活性化の企画を持ち込んだりしているが、本質は同様である。

「核」となる人々が地域にいないと、

活性化やまちづくりは成り立たないと言ってもよい。別の言い方をすれば、行政や商工会議所の音頭では一過性の「賑わい」で終わることの方が多い。もちろん行政や商工会が仕掛け、うまくいったという例はあるが、あまり多くはない。

中心メンバーが地域社会での存在感や、自分の暮らしをかかわらせて行動を始めたとき、まちおこしはうまくいく。

● 自分の暮らしとまちづくり



兵庫県立大学教授

中沢孝夫

培った知識・技能伝える ボランティア活動支援

和歌山県シニアマイスター活用事業



和歌山県福祉保健部社会福祉局
長寿社会推進課 ● 中谷茂正

「紀の国わかやま」と呼ばれる本県は、豊かな自然に恵まれた紀伊半島の南西に位置し、本年七月に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産に登録された霊峰高野山と熊野三山に象徴されるように、歴史と文化の宝庫として、また、黒潮洗う海岸線とマリンプールの美しい海、そして緑なす山々に恵まれた自然の宝庫として古くから親しまれてきた。

生きがいづくり・社会参加が重点

さて、本県の高齢化の状況は、平成十六年三月末日現在の高齢化率が二二・八％で、全国平均より約五年先行している。平成三年以降、毎年〇・五から〇・六ポイントの範囲で増加してきており、約五年後には四人に一人が高齢者になると予測される。一方、平成十三年度に実施した県民に対するアンケート調査（調査対象は二十歳以上の男女個人）では、高齢者とは「七十歳以上」と答えた人が全体の約八二％であり、さらに約四八％

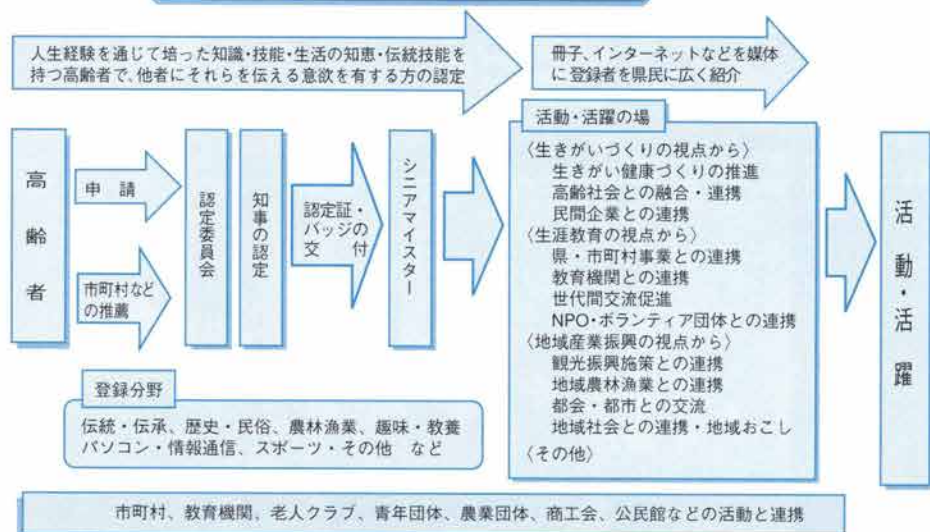


小学生に木炭作りを教えているシニアマイスターの梶谷弘氏

が「七十五歳以上」と答えている。また、「高齢者にとって大切な生きがい活動」のベスト3は、「若い世代との交流」「健康づくり」「ボランティア活動」となっている。この調査結果は、地域社会そのものが高齢者の社会参加を期待している表れと言える。

こうした中、本県では、「高齢者の生きがいづくりと社会参加」を長寿社会対策の重点課題の一つに掲げ、さまざまな取り組みを行っている。本稿では、その取り組みの一つである「和歌山県シニアマイスター登録・活用事業」について紹介する。

和歌山県シニアマイスター登録・活用事業 体系図



意欲的な高齢者を公募・支援

高齢者には、その長い人生経験から培ってきた知識や技能、生活の知恵、伝統芸能などを持つ人がたくさんいる。本事業は、こうした秀でた能力を持つ高齢者で、自己の得意分野について、ほかの人々に伝えよう、教えてあげようという意欲や熱意のある人をシニアマイスターとして認定し、その後のボランティア活動を支援するものだ。候補者は一般公募を行い、また、市町村や各種

団体からの推薦を受け、各分野の専門家を委員とする認定委員会に諮問の上、知事が認定・登録を行う。

登録分野は特に限定していない。現在登録されている主なものは、伝統工芸や紙芝居などの「伝統・伝承」、語り部や郷土史などの「歴史・民俗」、農業技術指導や木炭作りなどの「農林漁業」、着付けや竹細工などの「趣味・教養」、IT講習などの「パソコン・情報通信」、「スポーツ・その他」に分類される。

認定要件は、原則として県内在住のおおむね六十歳以上で、登録分野でおおむね五年以上の経験および実績があり、優れた技能や知識などを持つ、ボランティア活動に意欲や熱意のある人とし、経験年数を低くすること対象者の幅を広げている。

登録者については、紹介冊子などを作成のうえ、県内に広く配布し、また、インターネットを利用して紹介することで、シニアマイスターのボランティア活動の場づくりを支援している（事業体系は図参照）。



県老連大学校（県老人クラブ連合会主催）で紙芝居の実技指導をするシニアマイスターの北羅実氏（右）

また、本事業には、二つの効果も期待できる。

一つは、シニアマイスターの活動や心掛けを普及させることで、高齢者の誰もが身近なところから、今すぐ何かを始めようという起爆剤としてつながるといふ起爆剤としての効果だ。もう一つは、シニアマイスターの活動の場で直接的に、また、各種メディアなどで取り上げられることにより、間接的に「元気で活

がる。そして、もう一つは、シニアマイスターの活動そのものが地域社会への貢献となることである。技術を教え、習得してもらうために、あるいは保育所、幼稚園および小中学校での子供たちとのふれあいなど、さまざまな場面での貢献が期待できる。



三味線を教えるシニアマイスターの宮原正博氏

一方、平成十五年度のシニアマイスターの活動率は四五％であり、事業開始後一年足らずという点を考慮しても、決して高い活動率とは言えない。シニアマイスター制度を県民に深く浸透させ、活発な活動につなげることが今後の課題となる。

高齢者の持つ知識や技能、生活の知恵、伝統芸能などは社会の貴重な財産である。少子高齢化が急速に進む中、高齢者が社会を支える一員として、その持てる能力を存分に発揮できる活力ある長寿社会を実現すべく、今後とも積極的な施策に取り組んでいきたい。



陶芸を教えるシニアマイスターの徳田健次氏（左）

この事業の目的は、大きくは二つある。一つは、シニアマイスターとしての活動を通じ、自身の生きがいづくりや健康づくりに資することである。「申請」という能動的な行為、「認定」という社会的認知、「登録」からくる自負と緊張感、「活動」からくる充実感が、シニアマイスター自身の生きがいや健康づくり意識の自覚につながる。そして、もう一つは、シニアマイスターの活動そのものが地域社会への貢献となることである。技術を教え、習得してもらうために、あるいは保育所、幼稚園および小中学校での子供たちとのふれあいなど、さまざまな場面での貢献が期待できる。

活動機会増やすのが課題

力ある新しい高齢者像」を広く県民に説得力を持って提示できるという啓発の効果である。

平成十四年十二月の第一回認定以降、すでに九十三名のシニアマイスターが誕生している。「老人福祉施設で紙芝居を上演し、施設利用者との交流を図った」「子供と保護者を対象に工作指導を行い、親子が楽しくふれあえる場を提供した」

「住民グループに盆踊りや太鼓の指導を行った」「県内外の観光客に対し観光案内を行っている」など、さまざまな活動実績を報告していただいております、事業効果は着実に表れつつあると考えています。

市民にさまざまな

環境配慮行動メニュー提供

— 環境教育などで評価得る



岩手県花巻市環境保全課
主任主査 ● 平賀政勝

岩手県花巻市は岩手県のほぼ中央に位置し、宮沢賢治生誕の地、そして高村光太郎、新渡戸稲造とゆかりが深く、四季の変化に富み、美しい自然環境に恵まれた、多くの温泉を有する文化観光都市だ。また、東北自動車道、東北新幹線、花巻空港と高速交通体系が整った人口七万三千人の地方の小都市だ。

現在、当地域においても平成十七年度を目標に、周辺三町との広域合併が検討されているところだが、合併が実現すると、人口十一万人規模の都市として生まれ変わるとともに、山、川、湖沼、田園風景などの自然環境が一層豊かになる。その多くの自然環境の中で、さらなる都市機能の充実が図られ、市民の物心ともに豊かな生活の確保が可能な二十一世紀の理想の都市として新たな歩みができるものと期待される。

大切な地球と自然

地球は四十六億年前に誕生し、気の遠くなるよ

うな長い時空の中で、大気や海の創造、磁気による宇宙線防御、核と地表面と大気の絶妙な温度バランスや水の確保などで生物生息条件を整え、生命の誕生をみた。初期に誕生した海中の植物は光合成により大量の酸素を生成し、数多くの生物（種）を育み、進化し今日に至ったとされている。

人間もそのうちの一つの種であり、ごくごく最近出現したばかりだ。人間は磁場や大気に守られながら、酸素、水、食料、光や熱、エネルギーなどありとあらゆるものを地球や自然に依存して生きているため、文明や文化を持ち自分の力で生きていくと思いがちだが、結局のところ、人間は地球や自然、他の多くの種の生命によって生かされ



環境にやさしいまちづくりをマイスターと学ぶ中学生

ていると考える方が自然の摂理に適うものと解される。つまり、環境問題を論ずるとき、行政のみならずすべての人々が地球や自然への配慮を絶対に欠いてはいけない。

人と自然育てる

私たちは古くから、緑の山々や清らかな水の流れるなど豊かな自然の恩恵を受けながら、健康で文化的な生活を営んできた。しかし、物の豊かさや生活の便利さに重点を置いた生活の進展に伴い、二十世紀後半からさまざまな環境問題が顕著化し、自然の減少、廃棄物の増加、河川の汚濁、環境ホルモンや化学物質などの身近な問題から、地球温暖化やオゾン層の破壊など地球規模の環境問題への対応が問われるようになってきている。

当市ではこのような状況に対応し、環境配慮の行政を実施するため、平成十一年十二月に環境基本条例を制定し、行政、市民、事業者が一体となって環境問題に取り組む基本姿勢を明確にした。そして、平成十二年二月には環境基本計画を策定し、循環、共生、参加、国際的取り組みを柱とし、市、事業者、市民の役割を明らかにしながら、「人と自然を豊かに育てるまちづくり宣言」を議会議決で内外に示して人と自然を大切にいたささまざまな環境施策の展開を図ってきているところだ。

環境マイスター制度

今や国も自治体も市民も事業者も一緒になって

環境に配慮する行動が必要

であることは

当然であり、

当市もISO

の取得などで自ら環境負

荷軽減行動を実行しながら、

市民向け、事業者向け

のさまざまなメニュー

を多数提供しているが、

その中の環境マイスター

派遣制度は平成十五年四

月にスタートした。

このような制度は、国

においては「環境カウ

セラー制度」、岩手県においては「環境アドバイザー派遣制度」と「地球温暖化防止活動推進員派遣制度」があるが、本制度の創設の趣旨は、市民が利用しやすく、かつ市民が市民の環境配慮行動を支援するというシス



環境マイスター認証式



地球のためにできることをマイスターの林俊春氏に学ぶ

ムづくりが必要との考えからだ。

市の環境マイスター派遣制度は市民レベルの

ニーズに応えられる内容を提供することで、

国・県・市の各制度が有機的に作用するものと

考えている。

環境マイスターの実際

環境マイスター制度の概要は市

民の環境に関する研修会や実践活

動の要望に応じ、環境マイスター

として登録されている市民の中か

ら適切な指導者を派遣し、指導謝

礼（半日三千五百円）を市が支払

うというものだ。現在、環境マイ

スターは分野ごとに、環境保全全

般三人、緑化推進四人、廃棄物減

量三人、自然観察五人の合計十五

人が登録されている。

温暖化防止やエネルギー対策などは

もちろん、花木を育てることや、ブ

ナ林散策、川遊び、野鳥や植物を観

察することなどすべてが環境配慮行

動であるという大きな視点でとらえ

ているため、市民需要も講演会形式

から現地観察会までさまざまだが、

大変好評だ。特に、学校における総

合的な学習の時間を利用した環境教

育には大いに役立っているとの評価

を得ている。

マイスターの派遣実績はこれまで



花いっぱいのもち目指し、マイスターの盛山靖氏に学ぶ

に十四回、利用者千二百四十八人となっており、

そのうち小・中学生が七回、利用者は千二十三人。

分野別では自然観察六回、環境保全四回、緑化推

進二回、廃棄物減量二回となっている。

利用者からは、「環境問題は人間の生き方、考

え方の問題と教わった」（中学生）、「エネルギー

に関する興味・関心が高まり、研究活動が深まっ

た」（中学教員）、「ブナに守られている水資源の

ことを知り、水を大切に思うようになった」

「自然のあらゆる動植物の命を大事にしたい」（女

性）などの感想が寄せられている。

マイスターとともに

環境問題克服のために人間は努力を始めている

が、同時に、環境問題を引き起こしたのも人間の

活動が主原因であるという事実が気付き、地球や

自然にどれだけ配慮できるかが重要だ。郷土の詩

人宮沢賢治は「世界全体が

幸福にならないうちは個人の

幸福はあり得ない」と説

いた。この「世界」の意味

は、地球および地球上のす

べての命と解しているところ

ろであり、私たちは花巻市

をますます花と緑に囲ま

れ、自然と見事に調和した

都市にすることが私たちに

できる環境行動ととらえ、

マイスターと力を合わせ歩

む決意だ。

青果物の専門家育成し、地域に貢献

—1500人超えるマイスター世に送り出す



日本ベジタブル&フルーツマイスター協会

理事長

福井栄治

野菜と果物のおいしさや楽しさを伝えるスペシャリスト、ベジタブル&フルーツマイスターたちの活躍は地域とも深い関係を持っている。その土地特有の野菜や果物を生産する人や販売する人、上手に料理をする人のところへ直接出向き、消費者の視点から話を聞く熱心なマイスターがいる。

一般の人々が普段から感じている疑問やアイデア、保存のコツ、そしておいしく食べる秘訣、それらがその場所で長く愛されてきた理由などの情報を聞き、さらに、それらを分かりやすい形で現地の人々にはもちろん、別の地域の人にも伝えていく。例えば、地域の野菜や果物を栽培する、それらを使った料理をする、野菜や果物に関する手作りのチラシや本、ホームページなどを作成する人もいる。こういったマイスターたちは地域野菜の書籍作りや地域を紹介する新聞やテレビなどのマスメディアからも協力を求められている。

生産者と消費者との距離縮める活動を

日本ベジタブル&フルーツマイスター協会は二



市場見学の際、関係者に質問する受講者

〇〇四年八月で設立から四年目を迎え、これまでに千五百人を超える「ベジタブル&フルーツマイスター」を育成し、全国に送り出してきた。協会発足のきっかけは、私が大手総合商社の食品部門にいたころ、青果物に関する知識もなく売り場に立つ販売員に疑問を感じたことであった。私は生

産者と消費者がかけ離れているこの青果業界を改善できないかと考え、ワインのソムリエを見本とするベジタブル&フルーツマイスターを誕生させたのである。

協会が運営する講座は三段階に分かれており、初級のジュニアマイスターコースでは自分のライフスタイルに青果物の楽しさを取り入れる方法と、次のステップへの基礎を学ぶ。中級のマイスターコースでは、ジュニアで習得した知識と考え方を基に、野菜・果物の生産、流通、マーケティングの専門知識を身につける。そしてそれを世の中に広め、感動を伝えることが課題だ。上級のシニアマイスターコースでは、農業、流通、食育、調理、料理講師といった専門分野を極め、それぞれの分野で新たな価値を創造することが目標である。

協会が掲げる理念は、次の三点である。

- ① 消費者の方々が野菜・果物に関する楽しさ、新たな発見、感動などを見いだせる環境を創造します。
- ② 農業・青果物流業を含む、すべての食品・外食・流通産業に従事されている方々が、国民の健康維持増進に寄与しているというプライドを持って働ける環境を創造します。
- ③ 生産者の方々と消費者の方々との間の距離を、情報の相互流通を通じて縮める活動を行います。

奨学生に多数の農業関係者応募

これまで受講生の約七割は食や農業以外の仕事



消費者の立場から、野菜・果物や売場の演出手法などを学ぶ「イメージコーディネート」の授業

をする一般の人々であり、その多くが主婦やOLであった。彼女たちの目的は、自分自身や家族が安全で健康な食生活を送るために必要な情報を見極める力をつけることだ。授業が進むにつれ、それまで当たり前のように触れていた野菜や果物の個性や魅力に気付き始め、自然にその情報を周りに伝えずにはいられなくなってしまうというのである。

また、協会の取り組みが生産者にも注目されていることが、今年三月に農業の活性化を目的に行った奨学生募集の結果からうかがえる。農業に携わる方を対象にした三人の募集に北は北海道から南は鹿児島県まで五十人を超える応募があり、

「農業への思い」という作文課題にかなり優秀なものが集まった。予想以上の応募に対応し、急きよ五人に増やした奨学生は兵庫、岡山、福岡、熊本、鹿児島県の各県に住んでおり、その土地の風土に合った野菜・果物を作っている。

知識・情報周りに伝える必要痛感

例えば、福岡県在住の会社員だった三十代男性は結婚を機に実家の農業を継ぎ、キュウリやニンジンのほか、米や花も生産するようになった。生活習慣病やアトピー、ぜんそくなどの病気を考えたときに食の大切さを感じたという。マイスター講座を受けたことで、野菜や果物についてただ「おいしい」と表現するのではなく、その背景や環境なども含めて幅広い角度から見詰めるようになった。農家の人々が熱意を持って安全で安心な食品を作っても、それが正しく消費者に伝わっていないような気がするため、その両者の懸け橋になりたいと彼は話す。

熊本県の青果市場に勤務している四十代女性は、普段は市場内で事務作業や荷運びを主な仕事としているが、週末はご主人の本業である農業を手伝い約三十種類の野菜を育てている。彼女は、農業が日本の原点であると考えており、それを盛り上げることで日本の良さを、自分たちの国に対する誇りを取り戻すきっかけがつかれないかと考えている。そして、彼女の周りでこれから農業を始めたいという志を持っている人たちに、自分たちが携わることの重大さを伝えていきたいという。特に「コミュニケーション」の授業を受け、

自分だけが野菜・果物の知識を身につけるのではなく、それを周囲に上手く伝えていくことの必要性を痛感したという。彼女は熊本から講座会場の福岡まで、約二カ月間楽しく通い学び、新しい意識でこれまでの仕事を続けている。

地域とのかかわり広く、深く

現在、東京（渋谷と新宿）、横浜、名古屋（栄と新栄町）、京都、大阪、神戸、福岡、札幌十会場で講座を開講している。このように全国での開講が行われる以前は移動時間に時間がかかるため、東京での授業のたびに会社に有給休暇を申請した人や、往復に飛行機を利用して毎回東京で宿泊をした人もいた。全国各地で受講可能になってからは、各地方、各教室に同じ目標を持つ仲間が集まれるようになった。一クラス約四十人の受講生の年齢、職業はばらばらだが、授業中はみな真剣だ。しかし、終了後には互いに質問をし合い、教え合う姿を見ることができ、地域特有の野菜やイベントなどの情報交換も行われているようだ。生産者と消費者の交流がこのような小さな場所でも生まれている。

今後は、さらに広範囲にわたる講座運営が予想されるので、地域とのかかわりも広く、そして深くなるだろう。今まで以上にマイスター同士のつながりも期待でき、地域の活性化にかかわっていくことができるのではないだろうか。当協会はそれぞれの地域の野菜と果物という分野の新しい価値を確立し、豊かで楽しい食生活の実現に貢献しようとして取り組んでいる。

泡盛の専門家育成、需要拡大図る

— 歴史、味・香りの相違、料理との相性などに精通



泡盛マイスター協会
専務理事

杵鞭充治

に偏らず、泡盛について自由な意見を述べるとともに、すべての泡盛を応援していきたいという考えからだ。

泡盛の伝統文化を県内外に発信する「泡盛マイスター協会」が発足したのは昨年四月二十日のことだ。マイスターとはその職業の最高位を指す言葉で、あくまでも酒を造る立場ではなく、消費者サイドでの泡盛の最高位を目指したものだ。

泡盛には五百年以上の歴史があるといわれる。それははるか昔、琉球王朝時代、一四三〇年からシャム（現在のタイ）との貿易が始まり、十五世紀初頭にシャムから輸入された蒸留酒「ラオロン」や、最近では中国福建省の「露酒」が泡盛のルーツではないかといわれている。

● ワインのソムリエに倣う

泡盛マイスター協会はそんな泡盛に精通する専門家を育て、その普及促進を図ることを目的としてつくられた民間団体だ。バー経営者やパーティー、ホテルの飲料担当、酒販店の経営者・販売員、一般の会社員らが理事になっており、協会規約により酒造メーカーは理事、顧問、相談役にはなれない仕組みになっている。それはメーカー側



新里酒造での研修で、泡盛の仕込みの様子を見学する泡盛マイスター協会の会員

新垣勝信会長は「日本でこれほどワインがポピュラーになった背景には、ソムリエの存在が大きい。泡盛もこの足跡を追い、泡盛マイスターによって泡盛を沖縄から日本全国へ、日本から世界へと正確に紹介、普及させていきたい。今まで公的な専門家がいなかった泡盛の世界で、銘柄ごとの香りや味わいの違い、歴史、文化、料理との相性、醸造や蒸留方法、泡盛の医学的な効用などに精通し、テイステイングをし、その泡盛に合った料理や飲み方をサジェストする。あるいは客の好みや予算に合わせた泡盛をすすめる。総合的に泡盛を語ることができるプロを養成したい」と抱負を語る。考え方はワインのソムリエと同じだ。

● 全国シェア、依然低水準

泡盛の出荷量は「ちゅらさん」ブームや「本格焼酎」ブームも手伝って、県内をはじめ、県外に年々拡大している状態だ。特に県外需要については、平成十二年以降、対前年比一二五%以上となり、平成十五年度は一五二・二%と極めて良好な実績を上げている。

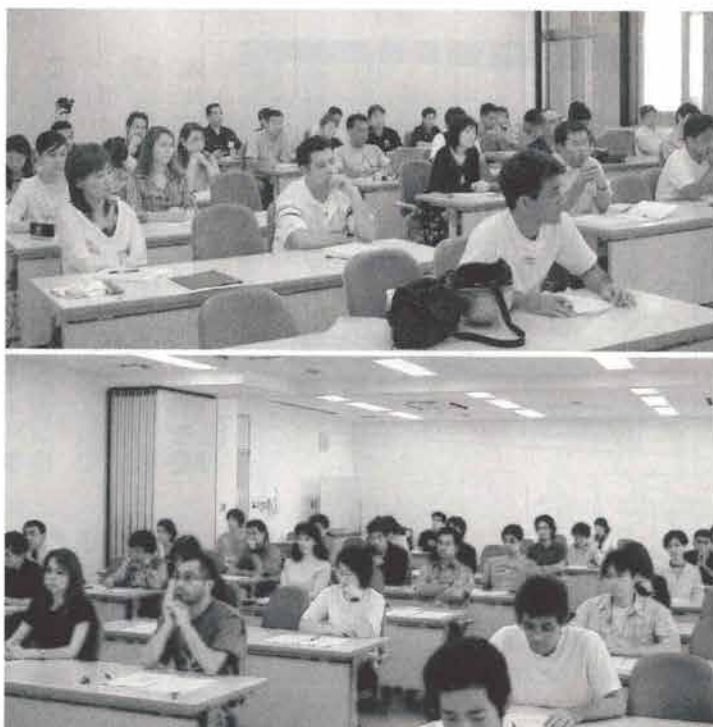
このように沖縄の泡盛は徐々に需要が伸びてきているが、平成十五年現在、全国の焼酎全体（乙類）の出荷量の七%弱、しかも九州・沖縄地区を除く市場占有率はわずか一%にすぎないのだ。沖縄県酒造組合連合会は泡盛業界の経営基盤の強化を図りつつ、大市場に対する夢の実現に向けて組織を挙げて取り組んでいる。

このような状況下で、泡盛マイスターや泡盛アドバイザーが誕生し、県内および県外において泡

盛について紹介することは、泡盛のさらなる需要拡大の支えとなり、沖縄県民の雇用促進や地域づくりにつながるものと信じてやまない。

● 今秋、マイスター1号誕生

泡盛マイスターの第一次学科試験対策講座と通信教育講座がスタートしたのは昨年六月からのことだ。この講座の中から、第一次の学科試験には泡盛の製造に対する質問は言うに及ばず、沖縄の歴史や文化、泡盛の定義・語源、県内四十七カ所の泡盛酒造所の名前、麹菌や酵母菌などの微生物の特徴、お酒の科学的知識、世界の酒、琉球料理など広範囲にわたって出題された。受験者は四十一人。うち男性二十七人、女性十四人と女性受



(上) 那覇市で2カ月に1回開催される泡盛マイスター認定試験の対策講座
(下) 4月18日、那覇市で行われた泡盛マイスター認定の第1次試験

験者が目立つ。沖縄県内から受験者は三十人、県外からは十一人。居酒屋経営者やバーテンダー、酒屋、空港の土産物屋での泡盛の販売人ら酒関係者以外にも、泡盛ファンのサラリーマンや主婦も多数受験している。

この第一次試験の後、十月の第二次試験Ⅱティスティングや口頭試問、実際のテーブルでのサービスのなどの試験が待ち受けている。東京では六月十九日（沖縄では五月十九日）から一次合格者や協会員に対してティスティング講座などが始まった。泡盛の日に当たる十一月一日に、泡盛マイスター第一号が晴れて誕生する予定だ。

● 普及促進にカクテルコンテストも開催

世界に広く知られている四大スピリッツの中で、最も個性豊かで野生的な酒にメキシコ中西部ハリスコ州テキーラ村のテキーラがある。この酒を大スターに仕上げた最大の功労者に「マルガリータ」というカクテルの存在がある。ロサンゼルスのパバーテンダーが、不幸にも流れ弾にあたり死亡したメキシコ人の亡き恋人のために考えたとい



瑞泉酒造での研修

うものだが、一九四九年のカクテルコンテストで入賞し、テキーラは世界にその名が知れわたることとなった。

泡盛もかつて非常に強くて個性的な酒といわれ、今でも敬遠されがちなお酒だ。そんな泡盛をどのように日本を代表する銘酒として世界に羽ばたかせるのかは我々にとつて大変大きな課題だ。沖縄で最初に泡盛を使ったカクテルをつくった新垣会長、伊波興治副会長の提案で、テキーラをヒントにそれを打開すべく全国泡盛カクテルコンテスト開催の案が浮上した。

そして、今年二月十五日、内閣総理大臣杯・全国泡盛カクテルコンテストが沖縄県社交飲食業生活衛生同業組合の主催で沖縄の地で、無事開催されるに至った。当泡盛マイスター協会も運営に協力した。

沖縄にはかつて百年以上寝かせた古酒（クース）がたくさんあったが、残念ながら先の大戦で尊い命とともにほとんどが消失してしまった。世界が恒久的に平和であることを祈らざるにはいられない。

泡盛マイスター協会本部事務局

TEL 098 (861) 5403
FAX 098 (869) 6696

北東北ウエルカムカードが誕生

岩手県観光経済交流課 主任 ● 畠山英司

私たち青森、岩手、秋田の北東北三県の「北東北国際観光テーマ地区推進協議会（以下「テーマ協」）」は、三県と国際観光テーマ地区会員の五十五市町村、観光団体などで構成する協議会であり、北東北の国際観光振興事業の推進組織である。平成十六年四月一日、テーマ協の新事業として「北東北ウエルカムカード」事業を運用開始した。

豊かな自然資源、文化歴史資源、温泉資源に恵まれた北東北では、平成九年に観光をテーマにした第一回

北東北知事サミットが開催された。サミットにおいて、北東北の連携により観光振興を推進するという合意がなされたことを契機に、テーマ協をはじめとする各種協議会がさまざまな連携事業を展開することになった。

国際観光における三県連携の象徴がこのカードである。この事業は数年来の懸案だったが、折からの国際観光需要の高まりと関係機関一丸の取り組みにより、昨年度にシステムが構築され、四月一日運用開始に至った。



北東北ウエルカムカード

当カードは、テーマ協の会員市町村内の登録施設などにおいて、外国人旅行者がカードを提示した場合に、割引などの各種優遇サービスを提供するものだ。外国人旅行者にお



専用リーフレット(左)と登録施設用店頭ステッカー

得で便利な旅をしてもらうことにより、一層の来訪および相互交流の促進を目指している。

カードの特徴は、インターネットを基本としたシステムという点だ。英語・韓国語・中国語の三言語対応のウェブ (<http://www.northern-tohoku.gr.jp/welcome/>) を利用して、加盟施設の募集登録、情報発信、

カードの入手などの手続きを簡単にを行うことができる。

登録施設は七月一日現在で百八十三に及び、分野は宿泊施設、飲食施設、観光施設、物産施設など多岐にわたる。カードは六百三十六枚が発行され、国籍別では、韓国が六四・六%と圧倒的に多く、次いで米国、香港、中国、台湾などの順となっている。このようなデータは今後の国際観光戦略策定上、貴重な資料であり、今後、実施予定のカード利用状況調査のデータとともに有効活用していきたい。

外国人旅行者の来訪促進は観光消費額の増加のみならず、異文化交流による相互理解や地域活性化につながるものである。私たちは北東北の観光関係者の理解と協力を得て、カードの内容の充実およびPRに努め、利用促進に向けて取り組んでいきたい。

- 北東北ウエルカムカード事務局
- 青森県文化観光部観光推進課
TEL 017-734-9386
- 秋田県産業経済労働部観光課
TEL 018-860-2268
- 岩手県商工労働観光部観光経済交流課
TEL 019-629-5574

蔵造りの音楽館整備

——市民と共同でつくるまちづくりの一環・長野県大町市教委

大町市教育委員会生涯学習課

● 大日方寿二

明治三十七年に建設された土蔵が百年の時を経て、「蔵の音楽館（音楽練習場）」として生まれ変わった。

同音楽練習館は地元バンドグループから提案を受け、大町市が平成十六年四月、バンドグループと共同で整備した。現在、高校生から社会人まで十五のバンドグループと個人が平日の夜間と土日を中心に定期的に利用している。

当初バンドグループは練習場の確保のほか、ミニコンサートホールも視野に入れた整備を求めていた。しかし、財政面や土蔵の立地条件から、すべての要望に応えることはできず、市が所有する市街地の土蔵を「若者の集まれる場所」として整備していくことで話し合いを続けた。

土蔵を活用した音楽館を整備するうえで、①土蔵の練習場としての適正（音響効果）②地域住民の理解（たまり場としての心配、人の出入り、騒音など）③管理人が常駐しな

いため、利用者による自己管理④水・トイレがない——などが問題点として指摘された。

設計（予算）
に關わる部分は市が進め、そのほかの部分ではバンドグループから大いに協力していた。適正確認、



蔵造り音楽館の外観

地元説明会（改修前後）での騒音測定のほか、竣工式、見学会と何度も演奏してもらった。

バンドグループは、管理人がいないうことで利用方法や規則をどう定めるか頭を悩ませ、また、土蔵が持つイメージをうまく利用したいと、クローズの選定にも悩み、休日返上で土蔵周辺の整備もしてくれた。使いやすくするために、設計段階でコンセ

ントの位置など細部も確認し合った。

周辺に暮らす住民への配慮も忘れてはいない。吸音効果を高めるために練習場へのカーテンの取り付け、入室時の音漏れ防止策、屋外看板への利用上の注意掲示（利用者の意思表示を周辺住民に知っていただくため）など、バンドグループからは数々の提案をいただいた。名称の決定も地域住民に施設を身近に感じてほしいとの願いから、地元説明会で協議した。

少ない予算で土蔵自体が持つ性質をうまく利用し整備できたことは、バンドグループと共同で進めてきた結果であると言えよう。当市は今後も話し合いの場を数多く設け、市民と共同で



バンドグループには「スタジオのようだ」と好評

つくるまちづくりを進めていきたいと考えている。

蔵の音楽館はバンドグループの要望により整備された施設である。当然そこには、実際の利用者や周辺に暮らす住民がいる。四月の段階では防音効果などの必要最低限の設備しか整っておらず、演奏器具もすべて自前であった。しかし、利用者は地域住民の理解があつて初めて設置することができた施設であることを認識している。使い方次第では、利用がでなくなることも……。また、自分たちの使い方方で「進化する施設」であることも。

利用者からすれば、ようやく整備された音楽練習場である。今では、利用者で組織する「利用者の会」を発足させ、使いやすく親しみやすい施設を目指して、利用方法の徹底から演奏器具の整備、定期的な施設の巡回まで行っている。今後、頻繁に使用され、地域住民の理解を得られれば、ミニコンサートホールとして進化することも決して夢ではないのかもしれない。

地域通貨の特徴とその支援策

はじめに

地域の持続可能な経済発展については、景気刺激を財政出動に頼る従来の手法による実現は困難である。むしろ、地域が有するさまざまな資源を有効活用しながら地域コミュニティの活性化を図ったり、地域内外のニーズにきめ細かく対応する新たなビジネスの創出などを通じて、個性豊かで活力ある地域づくりを推進したりすることが求められている。

そうした中、地域通貨は特定の地域やコミュニティに限り流通し、地域が持っている潜在的な活力を引き出すものであり、新たな経済活性化の手法として期待されている。

地域通貨とは

(1) 歴史

▼世界における地域通貨の取り組み

世界的な金融大恐慌が起こった一九三〇年代の初頭、欧米諸国では地方政府や民間団体などが独

自の通貨を発行し、経済危機をしのいだ。

例えば、オーストリアのヴェルゲルという町では、財政難に陥った町役場が発行した「労働証明書」が地域通貨として町内で利用され、地域経済の立ち直りに貢献した。

第二次世界大戦後しばらくの間、地域通貨は下火となったが、一九八三年にカナダ・バンクーバー島で始まった「LETS」をきっかけに再び脚光を浴び、以後さまざまなバリエーションが生まれている。

例えば、スイスの地域通貨「WIR」では、紙幣がなく、小切手または磁気カードと中央の口座とによって運営されている。同国の銀行法で認められた「WIR銀行」が運営主体であり、地域通貨を貸し出す融資事業、事業間決済を取り扱う決済事業を行っている。

▼日本における地域通貨の取り組み

国内で急速に地域通貨が広がったのは一九九九年ごろからである。

同年の初頭には数件程度といわれた国内の取り

組みも、二〇〇〇年には三十件、〇一年には百件以上、そして、〇三年には三百件以上の取り組み事例が確認されている。

当初は市民グループや少数の有志に限られていた運営主体も、年を追うごとにバリエーションが増し、地方公共団体や商工会、商店街などが地域通貨の運営に直接間接にかかわる事例も見られるようになった。

(2) 意義

▼コミュニティ活動の活性化

地域通貨を使った他の参加者とのサービスのやり取りは、コミュニティ活動活性化の契機となる。また、ボランティア活動のように法定通貨で対価を支払うことに十分な合意が得られていない分野、あるいは環境活動のように全国一律の価値付けが困難な分野などに地域通貨を活用することで、これまで潜在的には存在するものの具現化されてこなかった社会貢献活動の掘り起こしが促進される。

ITを活用した地域通貨の導入・普及検討

地域通貨とは

○特定の地域内などで限定的に流通し、法定通貨では表現されにくい「価値」を交換するための媒体

期待される効果

- コミュニティ活動の活性化
ボランティア活動の促進、コミュニティ・サービス事業の活性化など
- 地域経済の活性化
地域内消費循環の促進、地元商店街の振興、地産地消の促進など



総務省の支援策

- ICカードや携帯電話等を活用した地域通貨モデルシステムの開発・実証
- 地域通貨の導入・普及を図る地方公共団体の取組に要する経費を地方交付税に算入

ように、額面が表示された紙片をやり取りする方式である。

通帳方式

通帳方式とは、銀行の預金通帳のように取引内容や残高などを記録する用紙を利用して、地域通貨をやり取りする方式である。

通帳方式のメリットとして、①端数やマイナスなど、いかなる金額にも対応できる②一冊持つておくだけで過去の取引履歴が一覧できる③製作コストが安価——などが挙げられる。

口座方式

口座方式とは、地域通貨の各参加者の残高を運営者が一元的に管理する方式で、取引履歴などがデータベースや帳簿などに記録される方式である。

口座方式のメリットとして、①紙幣や通帳などの印刷コストが不要②遠隔地間やインターネットなど、物理的な地域以外でも取引できる③退職・散逸の恐れがない——などが挙げられる。

ITを活用した地域通貨

地域通貨の課題と解決策

地域通貨の仕組みが、地域経済の活性化に対して十分な効果を取るためには、一定の規模を実現することが重要である。しかし、規模が大きくなるにしたがって、運営コストの増大や偽造・セキュリティ対策、信頼性の確保など解決すべき課題が発生する。

こうした課題に対する解決策としては、ITの活用と地方公共団体の関与が考えられる。

ITの活用方策

地域通貨の運営にITを活用することにより、多数の参加者を前提とした瞬時の取引や、遠隔地間での取引が可能となり、しかも偽造などセキュリティ上の課題への対応も可能となる。

ITの活用方法としては大きく分けて、残高を口座で管理しオンラインで取引する方式（携帯電話やカードの認証機能を活用）、ICカードなどに価値を搭載しオフラインで取引する方式などが考えられる。

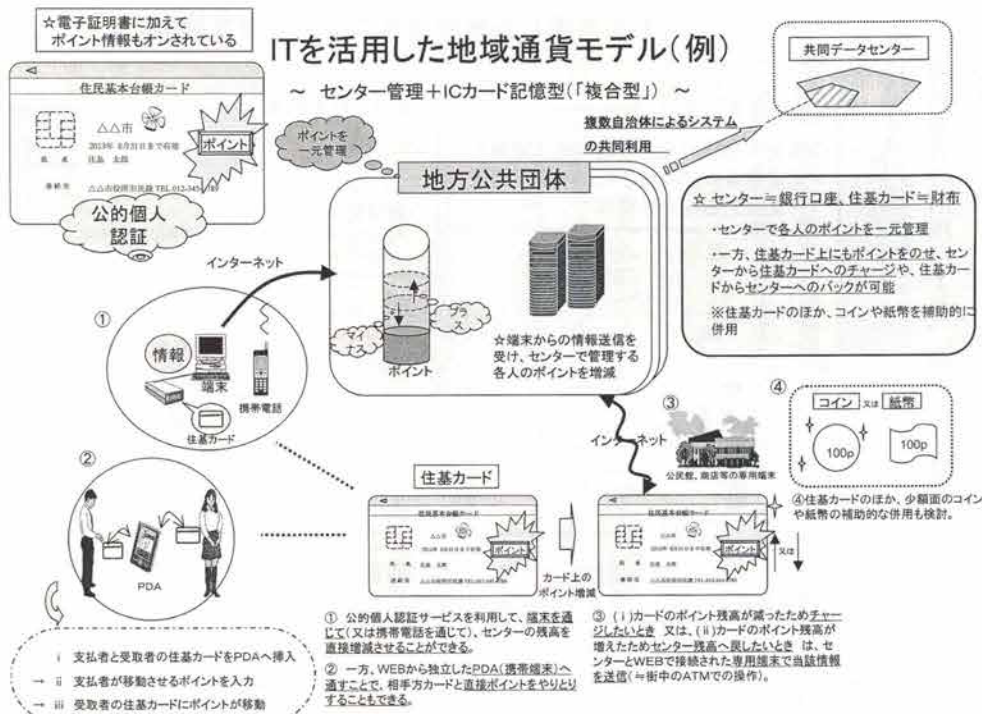
地方公共団体に期待される役割

地域通貨の仕組みに地方公共団体が関与することにより、システムに信用力や安心感が与えられる。さらに、地方公共団体はこうした仕組みを立上げ、軌道に乗せる際に、システムの土台となる運営基盤の提供、経費負担面での支援、アドバイザーの提供やPRによる支援、地域通貨の用途の拡大など、さまざまな面から重要な役割を果たすことが期待される。

「ITを活用した地域通貨」の推進

○三年度に開催された「新しい経済活動を伴う地域経済の活性化に関する研究会」（座長・加藤寛千葉商科大学学長）では、地域通貨に関して、①コミュニティ活動や地域経済を活性化する効果が期待できることから地域再生支援策の一環として、その導入・普及を推進すべき②その際、ITの活用と地方公共団体の役割が重要との議論がなされた。

そこで、総務省は、地域再生推進のためのプログラム（○四年二月二十七日地域再生本部決定）



の支援措置の一つとして、「ITを活用した地域通貨」を推進することとした。

これは、○四年度の新規事業として、住民カードや公的個人認証サービスなどを活用した利便性と信頼性の高い地域通貨モデルシステムの開発・実証事業を実施するとともに、○五年度以降、開発した地域通貨モデルシステムを地方公共団体に無償で配布するものである。

実証実験の実施箇所については、地域再生計画に同事業を位置付けて申請を行った地方公共団体に対しヒアリングを行い、有識者などの意見も踏まえた結果、三カ所の地方公共団体(市川市、北九州市、熊本県小国町)に決定した。

▼実証実験の実施箇所

実証実験の実施箇所の地域再生構想は以下の通り。

①市川市

地域の子育て、福祉、介護、健康、安全などの支援を必要とする住民のニーズを把握し、住民基本台帳カード、携帯電話などを活用した地域通貨を媒介として、コミュニティサービス事業を運営。

②北九州市

市民参加型の環境首都実現のための新たな仕組みとして、住民基本台帳カードなどを利用した電子エコマネーを全市的に流通させる「北九州市環境パスポート事業」を展開。

③小国町

都市住民の小国町への訪問や農作業・森林作業などに対し、地域通貨を発行。地域通貨は町営施設などで利用できることとし、小国町でのワーキングホリデーの取得やグリーンツーリズムを促進。

今後の予定

○四年七月二十七日に開催された「地域通貨モデルシステム検討委員会」(第1回)(座長・加藤寛千葉商科大学学長)では、

実証実験の大枠が承認された。

今後、各地域において地域通貨の受け取り場所、支払い場所の設定、実証実験と連動したイベントの企画など、実証実験をより楽しく、円滑に進めるための肉付けがされていくことになる。

実証実験の時期は○四年十一月から翌年一月までの二カ月間を予定している。

また、繰り返しになるが、開発した地域通貨モデルシステムは○五年度以降、地方公共団体に無償で配布する予定である。これを機に、多くの地方公共団体で、住民基本台帳カードや公的個人認証サービスなどを活用した利便性と信頼性の高い地域通貨モデルシステムが導入されることを期待している。

おわりに

航空会社にはFFP(フリークエント・フライヤーズ・プログラム)があり、カメラ量販店にはポイントサービスがある。交通系ICカードは言うに及ばず、最近では電子マネーを搭載した携帯電話も登場した。

楽しい、便利、カッコイイ、…。ポイント(電子マネー)を使い始める理由はさまざまである。しかし、ポイントを使い続けるうちに、いつしかその会社やサービスに愛着を感じるのではないだろうか。

総務省が推進したいと思う地域通貨はいわば「地域」のポイントである、地域通貨を使うことによって、地域に愛着を感じる人がますます増えると思う。

不慣れなディベートに 挑み、達成感も

(財)地域活性化センターが実施している、第十六期全国地域リーダー養成塾の合宿研修が、東京都多摩市の「CSK情報教育センター」で六月二十九日から七月二日までの三泊四日の日程で行われた。同養成塾は合宿形式による研修を年に一度行うこととしており、四日間寝食を共にして塾生同士が交流を深め合う機会にもなっている。

研修初日は研修所への入所に先立ち、(株)まちづくり三鷹を訪問し、市民参加をベースにコンピュータ利用の小規模事業所(SOHO)支援などIT

によるまちづくりを推進している三鷹市の取り組みを現地調査した。同社は中心市街地活性化法に基づく「まちづくり機関(TMO)」として、平成十一年九月二十八日に設



三鷹産業プラザの視察

パイロットオフィスなど五つのインキュベーション施設の整備運営、ビジネスプランコンテストの開催など、具体的な取り組みの説明を受けた後、活動拠点となっている「三鷹産業プラザ」内を視察し

立された。三鷹駅前地域を活性化するためのソフト、ハード事業の実施主体であるだけでなく、SOHOインキュベーション(ベンチャービジネスなどに施設やOA機器などを提供し、独り立ちの支援をすること)の整備運営やビジネスチャンスの拡大、コンサルティングなどのソフト

支援事業、まちづくり公社から引き継いだ「市民主体のまちづくり事業」などを行っている。同社の関幸子事業部マネージャーから、電子商店街「みたかモール」の運営、SOHO

た。同プラザにはSOHOや民間非営利団体(NPO)の事務局が入っており、ビジネス支援の取り組みの成果を調査することができた。

今回の研修で

は、(財)地域活性化センター小林実理事長の講話をはじめ、当養成塾の主任講師である早稲田大学宮口侗地教授から今回の研修



ディベート研修

のメインテーマ「交流と人材育成」の講義、東北芸術工科大学長谷川文雄大学院長から「地域情報化・IT」、(株)現代芸術研究所平野暁臣代表取締役から「地域とイベント」、東京大学篠原修教授から「景観とまちづくり」、熊本県小国町の(財)学び

やの里江藤調重事務局長から「地域間交流」など、研究者や実践家からそれぞれの切り口による熱心な講義を受けた。

また、同養成塾の特徴の一つでもあるグループでの演習として、(有)N&Sラーニング西部直樹代表取締役の指導の下、ディベート研修が行

われた。ディベートの論題は「日本はすべての高速道路を無料にすべきである」はるか非か。この研修は二日間にあたるもので、第一日

目は、講義終了後も六つのグループに分かれて夜遅くまで論理構築や、そのためのインターネットによる情報収集などを行った。翌日の「試合」では、塾生のほとんどがディベート未経験だったにもかかわらず、相手方グループの尋問に対して的確な返答を即座に返す場面もあり、前夜の作業の成果が十分発揮されていた。塾生たちは論理的思考とそれを人前で表明する訓練の必要性やチームプレーの難しさを感じたり、試合後の達成感を得たりしていたようだ。

四日間の合宿研修中、塾生たちは、多彩な講師陣の講義から知識を得たのはもちろんのこと、グループでの夜遅くまでの作業や夕食時における特産品の披露による各地域の紹介などを通じて、お互いへの理解を深め合うこともできたようだ。

(財)地域活性化センター研修交流課

堀 明子

町民による自主的な「まほろば」まちづくり

地域の史跡や自然など探索

「まほろば」のまちづくり

仙台市に隣接し、宮城県のほぼ中央に位置する大和町は人口約二万四千人、町のシンボルである七ツ森をはじめとした豊かな自然に恵まれた町だ。この町ではさまざまな場面、機会で「まほろば」という言葉を目にする。古事記の中でも歌われたように、意味は「素晴らしいところ」。今回は、この町でまさに「まほろば」のまちづくりを目指す住民団体「まほろばまちづくり協議会」の会長を務める佐々木末治さんと副会長の赤坂隆一さんと話を伺った。

「まほろばまちづくり協議会」の会長を務める佐々木末治さんと副会長の赤坂隆一さんと話を伺った。



佐々木会長（左）と赤坂副会長

想について検討が重ねられ、その中で具体的な事業として提案されたものの一つが、町全域を対象に保存、利活用、伝承すべき景観や風土、文化などを選定するという活動。活動の実動部隊として、平成十一年に未

団体プロフィール

設立年●平成11年12月
設立・運営主体●自主的組織
代表者●佐々木末治
会員数●15人
＜事務局連絡先＞
〒981-3624
宮城県黒川郡大和町宮床字下小路64
（宮床生産森林組合事務所内）
（電話）022-346-2112

くり協議会」の設立は、平成九年に町が二十一世紀に

引継ぎ、託すべき

夢や希望について

検討する「まほろ

ば未来づくり委員

会」を設置、委員

を町民から公募し

たのがきっかけと

なっている。委員

会では町の未来構

来づくり委員会の委員を中心にメンバー十三人の「まほろばまちづくり協議会」が設立され、町民による自主的なまちづくりを目的とした活動がスタートした。

まほろば探偵団の結成

まほろばまちづくり協議会は、町民自らが地域を探索し、埋もれてしまっている町の良さを発見することを目的として平成十二年一月より「まほろば探偵団」の活動を開始した。町内の地区ご

とに探索日を決

め、町の広報紙で

探偵団への参加を

呼び掛けた。町民

であれば誰でも参

加でき、参加者は

小学生から八十歳

代まで幅広い年齢

層にわたり、延べ

二百人を超える町民が探偵団の活動

たという。探索活動が回を重ねるにつれ、次はいつ行うのかという問い合わせも増え、町民の間にも徐々に関心が高まっていた。

「まほろば百選」の発行

平成十四年三月には、まほろば探偵団の活動結果をとりまとめた冊子「まほろば百選―未来への伝言―第一刊〈史跡・名跡編〉」が発刊された。当初はこのような形でのとりまとめは予定していなかったが、探偵団の参加者からせっかくの活動を形として残してみてはどうかという声が上がったことから、作成が決まった。企画、執筆、編集は協議会の会員自らが行い、冊子には探偵団に参加した町民の声が登場、表紙は町の写真展で入賞した作品を使うなど、文字通り町民らの手作りによって発行にこぎつけた。

こうして発刊した「まほろば百選」は、探偵団参加者はもちろんのこと、町内の小中学校をはじめ、公共施設などにも配布され、小学校では授業の教材としても活用されている。仙台市や富谷町など近隣の市町村からの問い合わせや、県外からも冊子を譲ってほしいとの要請もあり、反響は町内にとどまらなかった。



まちのシンボル七ツ森

また、協議会は発刊後のフォロー事業として、冊子で紹介した史跡についての案内用標柱を設置した。冊子内で史跡の場所を簡単なマップで紹介しているが、地理に不案内な人でも実際に現地を訪れる際、迷わずに済むようにとの配慮からだ。



フォロー事業として設置した標柱

今年二月には「まほろば百選」第二刊として、「人物編」が発刊され、町にゆかりのある人物を紹介している。第二刊においても単に資料に基づく記載だけではなく、地元の伝承の収集や、子孫、関係者らから聞き取りを行うなど、地道な作業を経て作成されており、人物に焦点を当てることで地域の姿を伝える内容となっている。

区内での注目度が上がり、どんと祭が復活したという神社もある。地元でも大変喜ばれたということ、このような話を聞くことが協議会の活動をしていて一番うれしく、これこそが探偵団の活動の成果であると佐々木会長と赤坂副会長は声をそろえる。



まほろば百選

今年二月には「まほろば百選」第二刊として、「人物編」が発刊され、町にゆかりのある人物を紹介している。第二刊においても単に資料に基づく記載だけではなく、地元の伝承の収集や、子孫、関係者らから聞き取りを行うなど、地道な作業を経て作成されており、人物に焦点を当てることで地域の姿を伝える内容となっている。

かけて自然とのふれあいを楽しんだ。これまで七つの山のうち二つは散策、残る五つについても必ず散策会を実施したいと赤坂副会長は意気込む。

これからは協議会は「まほろば」のまちづくりに向けて、新たな活動に挑戦し続けていくが、その根底には自分達の住んでいる地域の魅力をまず自分達が知ることから始めるといふ基本姿勢が貫かれており、今後の活動にも反映されていくことだろう。

今後は協議会だけの活動にとどまらず、町内の他のまちづくりを実践している団体とも連携して活動を行いたい希望を持っている。実際、その手始めとして今年二月にはフォーラムを主催し、町内のまちづくりに取り組む三つの団体と意見交換を行った。

を利用し、会員が休日を利用して、自分達の手で防腐剤やペンキの塗装から名称の書き入れ、設置作業まで行った。

「まほろば百選」に掲載されたことがきっかけで、地域内の注目度が上がり、どんと祭が復活したという神社もある。地元でも大変喜ばれたということ、このような話を聞くことが協議会の活動をしていて一番うれしく、これこそが探偵団の活動の成果であると佐々木会長と赤坂副会長は声をそろえる。

な活動を行っている協議会にも悩みはある。それは、協議会の会員の輪が広がっていないことだ。赤坂さんは「まほろば百選の発刊などの活動が実績として評価されているが、専門的で難しい活動を行っている団体だと思われる面がある」と語る。本来は自分達の住んでいる町の素晴らしさを気軽に語り合いながら、楽しくまちづくりの活動をしていく団体であり、多くの人に活動に参加してもらいたいというのが協議会の考えだ。

会員の輪広がらぬ悩みも

地域の仲間と 子育て楽しむ

団体プロフィール

設立年＝平成15年4月
設立・運営主体＝自主的組織
代表者＝渡辺和之
＜事務局連絡先＞
〒675-0303
兵庫県加古川市志方町細工所416-1
(電話) 0794-52-2708

職場と自宅を往復していた男性が

地域に入っていくきっかけ、定年後に地域に戻るきっかけは何だろうか。これまであまりかわることのなかった地域は温かく彼らを迎えてくれ、満足できる毎日を過ごすことができるのだろうか。仕事に就いている男性が地域でも活躍しているという新聞記事を見て、その組織を調べてみると、それは全国的に存在しており、男性が職場では発揮できない才能を地域で思う存分披露しているということが判明した。

その集まりの名前は「おやじの会」。平成十五年度に文部科学省の男女の家庭・地域生活充実支援事業として、香川県で「全国おやじサミット」を開催。続いて平成十六年六月に東京で「おやじ日本全国大会・

おやじ東京全大会」が開かれ、小泉純一郎首相もメッセージを送るほど注目されている。

仲間で、自主的に活動へ参加

今回、私が訪問した兵庫県加古川市にあるおやじの会は、特定非営利



おやじの料理教室

活動法人（NPO法人）子育てサポートはとのさとが運営するのはとのさと保育園の下に集まったおやじたちの会である。「主に父親が子供と楽しくふれあうことにより、父親の存在感を頼もしいものとして、深くそして印象的に子供の心に残すとともに、会員相互の研さんと親睦を図ること」を目的に平成十五年四月に誕生した。

これまでに実施した主な活動はクラフト木工教室、キャンプ、「どんぐりトトロ作り」、ネーチャールイング体験、「おやじの料理教室」など。木工教室では木工作業の得意なおやじが活躍し、キャンプでは事務手続き、買い出し、料理、後片付けにおやじたちが奮闘。ネーチャールイング体験ではクリスマスリースを作るために里山に入り、トイレのない山の中でぐずる子供を励ましたおやじの一人が学生時代のアルバイト経験を生かして講師を務め、見事な鍋さばきを披露した。はとのさと保育園の実施している学童保育にもスタッフとして参加し、キャンプの際に子供の歌の伴奏にギターやトランペットの腕前を見せたおやじもいた。

おやじの会は活動に参加しやすい

よう、決まった会費はとらず、参加できるときに参加してもらうという方針をとっている。おやじの会の下地となった保育園バザーの手伝いなどの活動は、最初は奥さんに頼まれていいいや参加していたのが、仲間ができてずる続けるようになること、だんだん園児がおやじの周りに「誰のお父さん？」と集まってくるようになった。おやじだって子供に好かれるのはうれしい。こうして自然に子育ての輪、地域の仲間との活動に入っていく。最初から子育てに真剣に取り組もうという意気込みがあったのではなく、仲間ができることで園の活動に自分から参加するようになったおやじが多い。

会の運営資金としては活動ごとに集める会費のほかに、補助金などを利用している。補助金を受けることで、自分たちの活動を外部の人に認知してもらうことができる。

子供らにつくる「育てる」 「聞く」姿を

もともと園の活動で顔見知りとなつた仲間がおやじの会をつくるきっかけは、平成十五年二月に子育てサポートはとのさとが主催した子育て講演会で聞いた広木克行・神戸大学教授の話だった。広木教授は子育て

における父親の役割の一つとして、次の二つのことを挙げた。

▽社会は幼児期の子供の育ち具合を

母親の子育ての成果としてみる。

父親は世間から受ける評価による

母親のストレスを解消できるように

に相談に乗ること。

▽命を大切にし、守っていくことの

大切さを子供に伝えるために、子

供に「つくる」「育てる」「聞く」

姿を見せること。

一般的に母親は子供につくる姿、

料理をする姿などを見せる機会が多

いのに比べて、会社勤めの父親は

子供につくる姿を見せる場面は少な

い。

講演会に参加した男性は口には出

さなくても子育て

に不安を持っ

ていたが、何を

すればいいの分

からないという

人が多かった。

その講演会が

開催されたころ、

はとのさと保育

園が財政危機に

陥り、自分の子

供、地域の子供が通う保育園を守る

ため、男性たちが立ち上がることに



クラフト木工教室

なった。これまでよりも積極的にバ

ザーを手伝い、保育園の活動を広く

紹介して入園児を増やし、保育園の

危機を救った。広木教授の話に感銘

を受け、保育園存続のために共に活

動してきた男性たちの中から、ほか

の保育園で「おやじの会」というの

があるみたいよ、と奥さんに言われ

て自分たちもやってみるかと思った

田中康彦事務局長、彼に声を掛けら

れてやってみようと思った渡辺和之

会長が、自分たちでイベントを主催

して、子供たちに父親や地域の男性

が活躍する姿を見せようための会

をつくることになった。

市内唯一の

NPO法人運営保育園

はとのさと保育園は、

昭和五十四年十月に加

古川市の元教員が始め

た認可外の保育所。横

野伊佐子園長がこの保

育所に来たのはその翌

年の春。姫路市と神戸

市に挟まれている加古

川市は、両市のベッド

タウンとして人口を増

やしてきた。平成十六

年四月一日現在、市内には認可保育

所は三十、認可外保育所は三十八あ

る。はとのさと保育園は現在、市内

で唯一のNPO法人が運営する保育

園である。

横野園長は、子育てについて相談

するところもなく不安を抱えている

家庭の話や、子供たちが集団で遊ぶ

場が欲しいという要

望があることを聞いて、

保育士として地

域で子供を育てるお

手伝いをしたいとい

う気持ちから、財政

的な苦勞を重ねなが

らも保育園を続けて

きた。地域の人にこ

の園のことを知って

もらい、子供を持つ家庭が地域と交

流するきっかけの場になるように、

公民館や福祉会館を借りて、コンサ

ートや講演会を開催している。

イベントのお知らせはタウン情報

誌などを利用しており、それを見て

地域の人が集まってくる。平成十三

年八月には社会的な認知を得るため

NPO法人の認可を受けた。

学生の参加得るなどとして

活動活発に

長年のはとのさと保育園の活動が

おやじたちの交流を生み、おやじた

ちは自分の才能をいかんなく発揮し、



どんぐりトトロ作り

職場とは違う自分を再発見し、子供

や地域の人に自分のことを認めても

らえる喜びを味わうことができた。

渡辺会長は市内で自営業をしてい

る。田中事務局長は現役の小学校教

師だ。子供のこと、仕事の悩み、家

庭の中で不満をアルコ

ールがなくても、一緒に

活動する仲間の前では遠

慮なく話すことができ

る。語り合ううちに仕事

仲間になることもある。

まだ発足して一年しか

たっていないおやじの会

だが、渡辺会長は、今後

の活動がマンネリ化しな

いように、次の活動を考えている。

会員には子供が園を卒業してもおや

じの会の活動には参加してもらいた

いし、子供と大人だけでなく、学生

も参加してもらい、活動を活発にし

たいと思っている。自分の父親だけ

でなく、友だちの父親、母親の姿を

見ながら育った子供が園を卒業し、

すてきなおとうちゃんおかあちゃん

になり、また地域の輪を広げてくれ

ることを楽しみにおやじの活動は今

後も続く。

(財)地域活性化センター

編集委員

久保田淑子

センター 通信

会員市町村など専用 「電子会議室」を開設

(財)地域活性化センターでは、会員市町村などの地域づくりに関する課題や相談案件にリアルタイムに対応すべく、インターネットを利用した情報交換窓口として、「電子会議室」を開設しました。

日々の業務の中で感じる、「知りたいこと」や「分からないこと」などがあつたら、書き込んでください。その事例について、知っている、またはかかったことのある方は情報をお寄せください。経験談や苦労話など、何でも結構です。ご意見でも構いません。

案件によっては、(財)地域活性化センターの会員コンサルタント(15社加盟)から提言を行うこともできます。

利用に当たっては、会員市町村限定のアクセス制限機能

を設定している関係上、パスワードを参加者お一人ずつに配布しますので、各課さまへもご回覧ください。
「電子会議室」の申込方法は、センターホームページ「地域づくり百科」から。

〈問合せ先〉

(財)地域活性化センター 振興部
コンサルタント業務課 佐久間

〒103-0027
東京都中央区日本橋2-3-4
日本橋プラザビル13階
(電話) 03-5202-6138
(FAX) 03-5202-0755
E-mail: sakuma@jcrd.jp

(財)地域活性化センター
ホームページへ

インターネットフォーラム

日頃の業務で悩んでいた、先進事例(アドバイス)が欲人と思うことってありますよね。

例えば、

- ・「地域通貨」に関する情報をお持ちの自治体の方、情報を提供ください。
- ・市町村合併、みなさんのまちは今、どうですか？
- ・地域福祉計画を策定しました。ご覧下さい。
- ・住民が中心となった「わがまちづくり計画」を企画したいのですが、といったように。

インターネットフォーラムでは、情報を共有し、意見交換ができる会員相互の交流の場を提供します。また、当センターからも情報提供をさせていただきます。

奮ってご参加ください

● 利用するには

● 利用規約を読む

入室

お知らせ

平成16年度 地域産品・観光おこし研修会のご案内

「わがまちを魅力ある観光地にしたい」「地域の特色を活かした産品を作りたい」
「特産品を活かした観光おこしを行いたいのに方法が分からない」
などのお悩みをお持ちの皆様 !!

(財)地域活性化センターは、例年ご好評いただいております「地域産品・観光おこし研修会」を今年度は東京において開催いたします。

この研修会は、地域の人々が自らの地域の資源や特性を把握し、新たな特産品開発や魅力ある観光地づくりを進めていくための着眼点や手法を、講演やグループ演習などを通じて実践的に習得していただくことを目的としています。「産品アドバイス会」では、参加者の方が実際に販売している産品について講師の先生より直接アドバイスいただけます。また、今年度は先進的な取り組み事例について観光カリスマによる特別講演を行います。

各地で観光振興・産品開発に携わっておられる皆様、奮ってご参加ください。

開催地・会場	東京都文京区 弥生会館
日程	11月1日(月)～2日(火)
研修内容	講演、産品アドバイス会、グループ演習
講師	須川一幸氏 <(株)地域振興研究所代表取締役> 河合進氏 <観光カリスマ・群馬県新治村助役> 澤功氏 <観光カリスマ・東京都台東区 澤の屋旅館館主>
募集人数	50名(先着順)
参加費	7,000円(税込み、受講費・昼食費・交流会費を含む)
申込期限	9月30日(木)

※研修会の詳細は、ホームページをご覧ください。
<http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp>

●問合せ先：(財)地域活性化センター 振興部 業務第2課 梶島・業務第1課 木下
〒103-0027 東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階
TEL：03-5202-6137 FAX：03-5202-0755 E-mail：kabashima@jcrd.jp

いとしき、福井県。

もう一度、行きたい福井県に
昔から感動はいつまでも心に残るものね
戦国時代の喧騒が蘇る一糸谷銅金式遺跡
冬の越前海岸に涼と咲く水仙の花
風光明媚な三方五湖、湯治を東尋坊
春の足羽川、桜の基木道
目とくれば、今でも、思いのほかに
私が青春側を過ぐし、福井県



紫式部
「源氏物語」
「源氏物語」
「源氏物語」
「源氏物語」

奥深し、福井県。

一度、池めぐり福井県を歩いてみるよ
おかげで、良いものが揃いました
さすがに古くから食の国と呼ばれた土地じゃ
京に選ばれたという誇りや名産が、何を誇るべき
「特選道」なるものを造って
大抵おろしとだくが、現地の誇り、それは
冬の味覚の王者、越前かに
本当に味わい深い、ささき、福井県



松尾芭蕉
「奥の細道」
「奥の細道」
「奥の細道」
「奥の細道」

手前みそ
ですが…

大正町

高知県

69



轟公園の石の風車

大 正町は、四万十川の中流域に位置し、四万十川に流れ込む幾筋もの支流が緑深い山々に溪谷を刻み、原生林を生みだしている。

町内で産出される木材の中心は、品質のよい四万十檜^{（ひのき）}。独特の薄紅色と香りの高さで全国的にも高い評価を受けている。

春には、県鳥でもあり「まぼろしの鳥」ともいわれる「ヤイロ鳥」のさえずりを聞くことができ、夏には四万十川ならではの「あゆ」の友釣りや幻想的な火ぶり漁、カヌーなどを楽しむことができる。大規模オートキャンプ場も整備され、県

自然がいっぱい、楽しいことうけあい

内外の観光客にも好評だ。さらに、町内の奥地では神秘的なホテルの乱舞を観光船で遊覧することができる。

このほか、町のシンボルとも言える轟公園の石の風車^{（ふうぐるま）}は訪れる人々を楽しませ、昔の森林軌道の名残橋^{（めがね橋）}は優雅な曲線を描き、遊歩道「ウォーキングトレイル」では森の中をのんびり散歩することができる。

このような自然いっぱいの野、山、川は私たちの大きな財産だ。

「自然がいっぱい、楽しいことうけあい、自然と、とことん語り合おう」



かつての森林軌道の名残橋（めがね橋）



清流、四万十川でのアユの火ぶり漁

7月
(実施)

★日本橋ブラザビルイベントスペース

- 7月1日～2日
行田市観光協会（埼玉県）
行田市観光キャンペーン
- 7月8日～9日
中東遠観光振興協議会（静岡県）
中東遠観光振興協議会 東京観光キ
ャンペーン (1)
- 7月14日～15日
木曽ふるさと振興会
木曽御嶽・木曽駒ヶ岳山麓 観光
と物産展 (2)

★ふるさと情報プラザ

- 7月5日～9日
岩手県市町村東京事務所協議会
魅知の国 岩手の祭り物産PR展 (3)
- 7月15日～16日
高梁市地域観光協議会（岡山県）
備中たかはし松山踊りと観光PR展 (4)
- 7月26日～30日
石岡市観光協会（茨城県）
石岡のお祭りと観光PR展

9月
(予定)★日本橋ブラザビル
イベントスペース

- 9月2日～3日
奈良県広域地場産業振興セ
ンター
- 9月6日～7日
大潟村（秋田県）
- 9月9日
近畿6府県首都圏観光連絡協
議会
- 9月13日～14日
藤沢市観光協会（神奈川県）

★ふるさと情報プラザ

- 8月30～9月3日
プラザ自主企画
「カゴ展」
- 9月6日～10日
西日本中央連携軸沿線都市連携
中国・四国縦断200キロ展
- 9月16日～17日
奥信越観光協議会
奥信越の味自慢展

【編集後記】

▼日本各地は七月以降、記録的な猛暑が続いて
いる。その恩恵に浴し、エアコンをはじめ、夏
物の衣料、飲料などが飛ぶように売れた。オリ
ンピック開催で、大画面薄型テレビなどデジタ
ル商品の売れ行き好調も重なって、個人消費が
大いに盛り上がったという。

猛暑は八月も続き、「観測史上、最も暑い夏
になる可能性が高い」（気象庁）といわれるが、
専門家は「地球の温暖化が影響している」と警
告する。ものの流れが活況を呈することは結構
だが、無条件に喜ぶわけにはいかない。

▼今号は「マイスター制度」への取り組みを紹
介した。分野はものづくり、農業、観光、高齢
者対策、環境など多岐にわたった。この中での
ものづくりの分野において、幾つかの自治体が制
度立ち上げの理由に深刻な後継者不足を挙げ
た。最近よく耳にする問題だ。基調原稿の海野
教授は若者をものづくりに目を向けさせるに
は、技術・技能者の社会的地位の向上とその処
遇改善が前提だと強調している。その意味で、
紹介した自治体の努力を多としたい。

▼弊誌の編集を新しく担当することになりました。
自治体を中心に、さまざまな先進事例を多
角的に取り上げていく考えです。ご協力、ご支
援をお願いいたします。

(中)

地域づくり9月号

平成16年9月1日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131 (代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

大当たりは幸運の流れにのって。

ふと、夢みる心が目覚めたら。
どうか宝くじを思い出してください。
もしかしたら、もしかするかも、
知れないのです。

宝くじの収益金は、
身近な街づくりに役立っています。



財団法人 **日本宝くじ協会**

当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

<http://www.takarakuji.nippon-net.ne.jp>